

沖繩県糸満市^{まぶに}摩文仁^{ぼる}ハンタ原遺跡発掘調査報告（1）
—沖繩県糸満市所在の摩文仁ハンタ原遺跡発掘調査報告—

2009

土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム
糸満市教育委員会

序

日本列島で人類は発生していない。今から10万年～7万年前、アフリカを出発したヒトが、はるか昔、大陸から日本列島に渡ってきて、最初の日本人になった。渡来ルートについては、地理的にみて3つのルートが想定される。1つ目は、樺太を經由し北海道に入ってくるルート、2つ目は、朝鮮半島を經由し九州北部や中国地方に至るルート、3つ目は、中国南部から台湾と琉球列島を經由し九州南部に到達するルートである。

土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアムは、日本人の起源とその形質変化を明らかにするとともに、調査研究の成果から未来の形質を予測する試みをおこなっている。

この研究の一環として、琉球列島における形質変化を明らかにするために、この地で縄文時代や弥生時代に相当する時期の古人骨の調査と研究を続けている。この課題を解明するために1998年と99年に八重瀬町（旧・具志頭村）に所在するガルマンドウ原洞穴遺跡の発掘調査をおこなった。この調査では、人骨と土器および貝製品をセットで発掘することができた。検出された人骨や遺物は土器や理化学的な年代測定によって縄文晩期の所産と推測されている。港川人と縄文人の関係を明らかにするために、さらに古い時代の人骨や遺物を求めて、掘り下げようとしたが、大岩に阻まれ、発掘調査を断念せざるを得なかった。出土した人骨は約21体であるが、頭蓋の保存状態は悪く、頭型や顔面の特徴を明らかにすることはできなかった。

摩文仁ハンタ原遺跡からは、本文で詳述しているように多量の人骨と貝製品が出土し、縄文人の形質的特徴や埋葬形態を知ることができた。また、多様な装身具類も発掘することができた。その内容は本島南部の遺跡としては瞠目すべきものがある。

本遺跡の発掘調査はまだ終了していないが、遺跡の重要性を考慮し、取り急ぎ2007年と08年の発掘調査の成果を報告することにした。発掘調査は09年に終了する予定なので、人骨については、07年出土人骨についての記載に留め、2010年に刊行予定の報告書で詳述したい。

2009年（平成21年）3月

土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム
館長 松下孝幸

例 言

1. 本報告書は、2007年度（平成19年度）と2008年度（平成20年度）におこなった沖縄県糸満市に所在する摩文仁ハンタ原遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアムと糸満市教育委員会が共同で実施した。
3. 人骨の実測・トレースは松下真実、中野江里子が、人骨の整理・復元などは松下玲子、磯部美恵子、中野江里子がおこない、考古遺物の整理・実測・トレースは大城一成、城間千栄子、登真知子、大城愛梨（糸満市教育委員会）がおこなった。
4. 地形測量などは株式会社埋蔵文化財サポートシステム沖縄支店および株式会社パスコ沖縄支店の協力を得た。
5. 本書の編集は松下孝幸がおこない、原稿の執筆は松下孝幸、湖城 清、大城一成、松下真実がそれぞれ分担した。

本文目次

第Ⅰ章 序説	6
第1節 調査地と調査期間	6
第2節 調査に至る経緯	6
第3節 調査の目的	7
第4節 遺跡の位置と環境	7
第Ⅱ章 調査の内容	11
第1節 調査の概要	11
1. 遺跡の立地と概要	11
2. 調査方法と調査の概要	11
第2節 層序	13
第3節 遺構	15
第4節 遺物	15
A. 人工遺物	15
B. 自然遺物	29
第5節 人骨	29
1. 人骨の出土状況	29
2. 人骨の年代	30
第Ⅲ章 まとめ	30
付編1 沖縄県糸満市摩文仁ハンタ原遺跡出土の縄文人骨（1）（松下真実）	42
挿図目次	
第1図 沖縄本島及び糸満市の位置	8
第2図 遺跡の位置	10
第3図 摩文仁ハンタ原遺跡 地形実測図	12
第4図 Aグリッド第1トレンチ東壁層序	14

第5図	AグリッドピットX南壁層序	14
第6図	Bグリッド第1トレンチ南壁層序	14
第7図	遺物実測図1	18
第8図	遺物実測図2	20
第9図	遺物実測図3	22
第10図	遺物実測図4	25
第11図	遺物実測図5	27
第12図	遺物実測図6	28

挿表目次

第1表	集骨1出土白玉観察表	16
第2表	集骨1出土タカラガイ製品観察表	16
第3表	集骨2出土白玉観察表	17
第4表	集骨2出土タカラガイ製品観察表	17
第5表	集骨3出土白玉観察表	21
第6表	集骨3出土タカラガイ製品観察表	21
第7表	集骨4出土白玉観察表	23
第8表	ST-01出土白玉観察表	24

図版目次

第1図版	1 遺跡遠景	33
	2 遺跡近景	
	3 発掘作業風景	
	4 ふるいがけ作業風景	
第2図版	1 サメ歯有孔製品(集骨3)出土状況	34
	2 貝輪(集骨3)出土状況	
	3 シャコガイ製有孔異形板状製品(集骨3)出土状況	
	4 線刻有孔製品(集骨2)出土状況	
第3図版	1 貝輪(集骨2下層)出土状況	35
	2 発掘作業完了の状況	
	3 貝輪(集骨3)出土状況	
	4 埋め戻し完了風景	
第4図版	出土遺物1(集骨1 集骨2)	36
第5図版	出土遺物2(集骨2 集骨2下層 集骨3)	37
第6図版	出土遺物3(集骨3 集骨4 Aグリッド)	38
第7図版	出土遺物4(ピットX ST01北 ST01伴出 Bグリッド)	39
第8図版	表採遺物1	40
第9図版	表採遺物2	41

第 I 章 序説

第 1 節 調査地と調査期間

1. 調査地

遺跡名：摩^ま文^ぶ仁^にハンタ^{ぼる}原遺跡

所在地：沖縄県糸満市字摩文仁ハンタ原 5 4 7 番地

2. 発掘調査期間

第 1 次調査：2007 年（平成 19 年）7 月 2 日～ 10 日

第 2 次調査：2008 年（平成 20 年）7 月 7 日～ 13 日

3. 組織・調査者・協力者

《組 織》

- ・発掘調査統括者 松下孝幸（土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム・館長）
- ・考古学統括者 湖城 清（糸満市教育委員会文化課・課長）
- ・人類学現場責任者 松下真実（土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム）
- ・考古学現場責任者 大城一成（糸満市教育委員会）

《 2007 年 》

（ 1 ）調査者

松下孝幸、松下真実、磯部美恵子、松下玲子、中野江里子

（土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム）

湖城 清、大城一成、城間千栄子、登真知子、大城愛梨（糸満市教育委員会）

堤浩一朗、知花一正、喜屋武志保（株式会社 埋蔵文化財サポートシステム沖縄支店）

国吉 勇

高椋浩史（熊本大学文学部 4 年）

（ 2 ）協力者

浜田哲二（朝日新聞社）、平野雅俊（株式会社 文化映研）

《 2008 年 》

（ 1 ）調査者

松下孝幸、松下真実、松下玲子、中野江里子（土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム）

湖城 清、大城一成、城間千栄子、登真知子、大城愛梨（糸満市教育委員会）

堤浩一朗、松浦 智（株式会社 埋蔵文化財サポートシステム沖縄支店）

木口裕史、牛ノ浜修、翁長武司、仲宗根文子、渡辺美幸、青木絵美（株式会社 パスコ）

国吉 勇

井川一成（長崎大学歯学部大学院）

4. 遺跡の発見者

国吉 勇

第 2 節 調査に至る経緯

本遺跡においてボランティアによる遺骨収集がおこなわれた際に、貝製品や石灰質に被覆された人骨が発見されたことから、この地点が沖縄の先史時代の遺跡であることに気づいた国吉勇氏は、遺骨収集活動を中止させ、現場を保存するとともに、人類学ミュージアムの松下孝幸にこの事実を報告された。報告を受けた松下は現地を視察し、人骨の残存状態と出土状況を確認するとともに、遺骨収集坑周辺の表土から遺物も採集することができた。すでに採集されていた貝製品は完形品であり、遺物や人骨の検出状況から、人骨は沖縄県では例数が少ない縄文時代相当期に属する人骨である可能性が強いことがうかがえた。人類学ミュージアムと糸満市教育委員会は数回に亘って現地の視察と協議を重ね、遺跡の重要性に鑑みて、発掘調査を実施することにした。（松下孝幸）

第3節 調査の目的

沖縄県では約 32000 年前の山下洞人や約 18000 年前の港川人などの旧石器時代人骨が出土しているが、それに続く縄文人骨や弥生人骨の出土例はけっして多くない。そのために琉球列島では、港川人などの旧石器時代人がどのように変化し、現代人の形質を獲得するに至ったかなどは明らかになっていない。

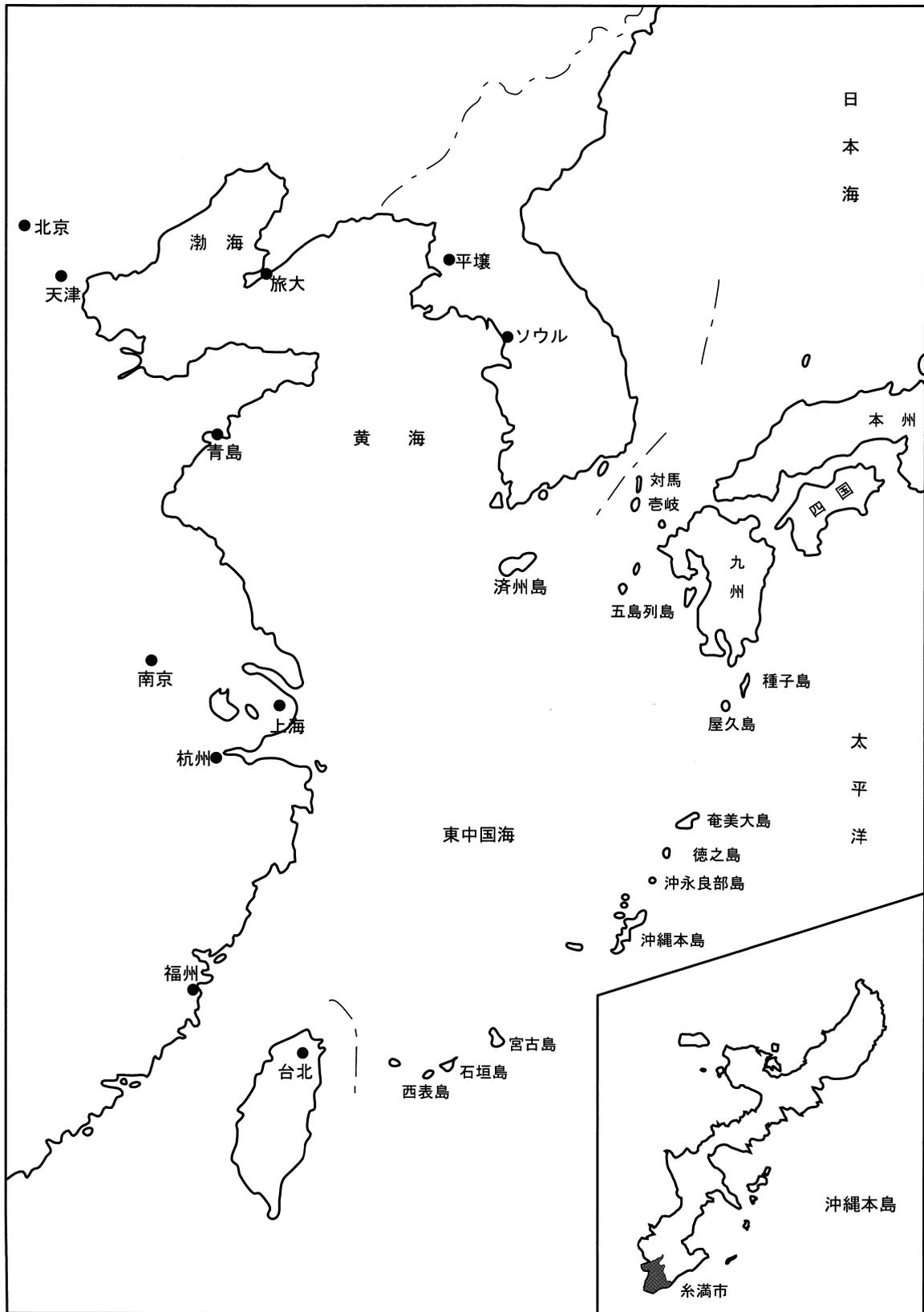
近年、沖縄本島から縄文晩期から弥生前半に相当する人骨が出土し（クマヤー洞穴、具志川島遺跡群、真志喜安座間原遺跡、ガルマンドウ原洞穴、伊礼原遺跡）、縄文晩期人の形質が弥生人と連続しない例が知られるようになってきた。松下は、この事実と数は少ないものの、中国大陸（山東省）に琉球列島の弥生人骨に酷似するものがあるという事実から、縄文晩期から弥生時代にかけて琉球列島にもヒトの移動（渡来）があったのではないかと推測している。しかし、本地域では縄文人骨に関していえば縄文後・中・前期の形質が明らかになっていないので、縄文晩期人がそれ以前の人びとと連続しているのかどうかはわからない。琉球列島でのヒトの動きを探る上で縄文時代から弥生時代への移行期の人骨の形質的特徴を明らかにしておくことは重要であるが、同時に縄文時代の各時期の特徴を明らかにし、その形質変化の解明も必要である（松下、ガルマンドウ原洞穴遺跡発掘調査報告）。このような視点から 1998 年と 99 年に八重瀬町にあるガルマンドウ原洞穴の調査をおこなった。この調査では縄文晩期人骨の例数を増やすとともに縄文中・前期人骨の発掘も期待したが、落石のために掘り下げることができなくなり調査を断念した。

本遺跡では人骨の堆積層が厚く、貝製品などの遺物も多いことから、沖縄本島南部における縄文時代の埋葬や人骨形質を明らかにすることができるだけでなく、縄文後・中・前期人骨の発見も期待できそうなので、本遺跡の調査をおこなうことにした。（松下孝幸）

第4節 遺跡の位置と環境

① 地理的環境

摩文仁ハンタ原遺跡の所在する糸満市は、沖縄本島最南端の北緯 26 度 8 分、東経 127 度 40 分にあつて、県庁所在地の那覇市から南へ約 12 km の距離に位置する人口 58,114 人（2008 年 12 月 31 日現在）、面積約 46.40 km² の市である。市域は東西約 7 km、南北約 10 km の略形状を呈し、東側は八重瀬町、北側は豊見城市と境界を接する。本市西側は東中国海、南側・本島最南端の荒崎は太平洋に面して



第1図 沖縄本島及び糸満市の位置

いる。気候は亜熱帯性気候に属し、年平均気温は22.4℃で、月別平均気温は、16℃～28.1℃の範囲内であって四季の変化は比較的不明瞭である。しかし、大陸性高気圧と太平洋高気圧の影響で5月～8月は南東風が吹いて梅雨や台風をもたらし、湿度が高くなるため蒸し暑く不快指数は高くなるが、冬季になると乾燥した強い北東風が吹き付けるため、気温の割に体感温度は低く感じる。

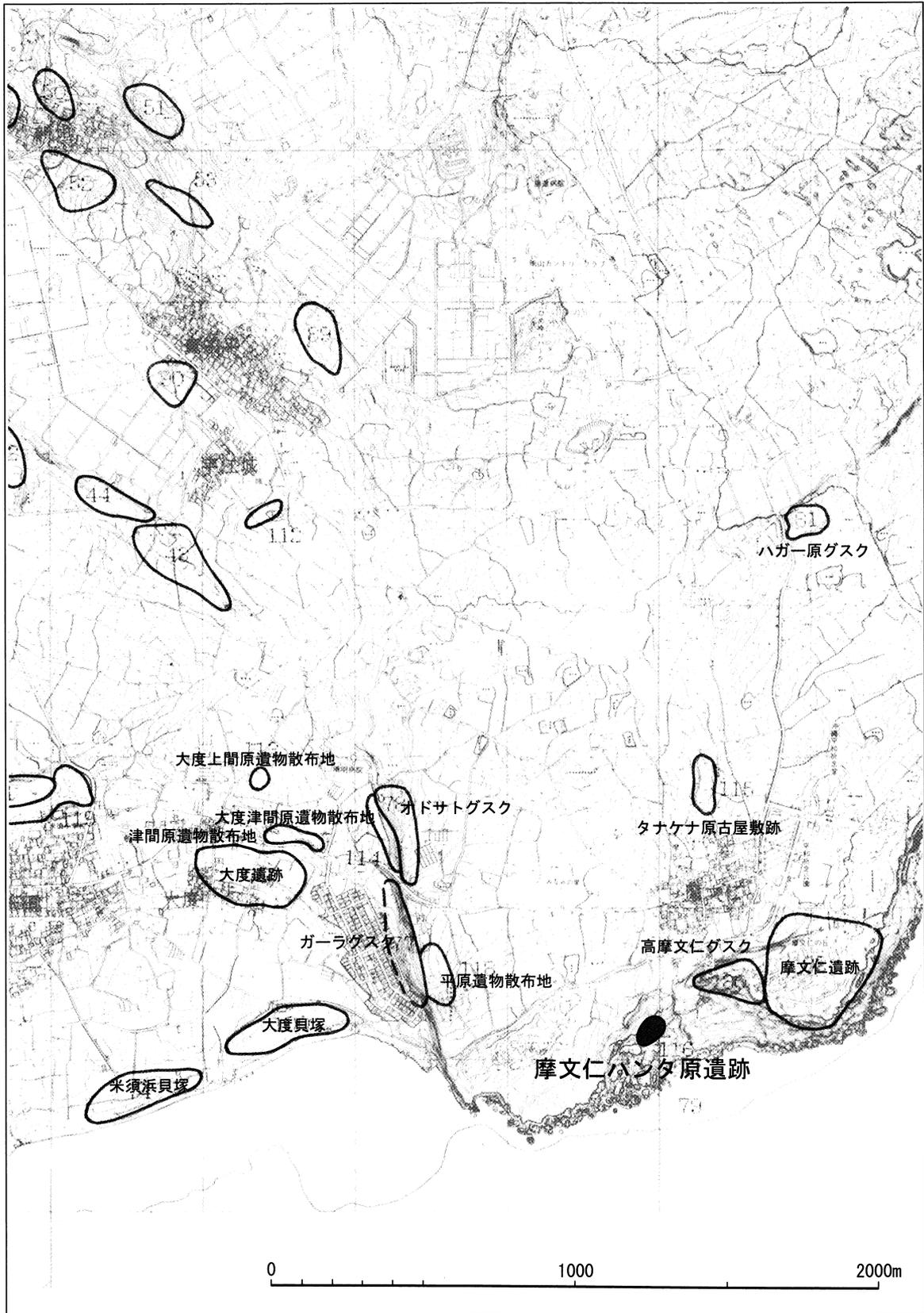
糸満市の地形は台地が主体である。台地は琉球石灰岩（以下、「石灰岩」）から構成され、新第三紀泥岩（島尻層群・クチャ）を不整合に覆っている。石灰岩は隙間の多い浸透水層であるため、空気中の炭酸ガスを含んだ雨水が石灰岩を溶かしながら地下に浸透するが、粘土層であるクチャが止水するため不整合部に地下水脈をつくりだす。従って、石灰岩が覆う地域については、河川は形成されにくいものの、地下水は豊富となる。市域の台地は、北西―南東方向と北東―南西方向の断層による変異を受け、一般に北側が5～10mの断層崖をつくる丘陵となり、南西あるいは南東方向へ緩く傾斜する地形をつくりだしている。断層崖からなる丘陵は堤防状に長く延びる石灰岩堤となって、北風を遮る自然の要害をつくりだしており、南風の吹く夏は涼しく、北風の吹く冬は丘陵が風を遮るため、集落を形成する好環境をつくりだしている。市域の状況として、石灰岩堤を背景に緩斜面に集落が形成され、その南側低地で水源である村泉（ムラガー）と広がる畑がある。そのため、各集落の縄張り範囲は、集落背後の丘陵断層崖から集落の位置する緩斜面部、畑のある南側くぼ地を経て前方断崖までと限られた範囲を持つのが集落縄張りの特徴である。ちなみに集落北側丘陵上にはその集落の支配者の居城と言われる「グスク」が築かれている。

本遺跡の所在する摩文仁は、太平洋に接しており海岸は10～30mの海食崖を形成している。一帯には離岸した5～10mの巨石が点在しており、巨岩は再び波の浸食を受けて「キノコ岩」をつくりだしている。摩文仁一帯は浸食の進む比較的新しい地形だと言われており、集落内に湧水は無い。湧水は、摩文仁平和公園内平和の礎南東崖下と同公園西端・健児之塔南側の二箇所を確認されている。地元では前者を「ワリチリガー」、後者を「チンガー」と呼び、集落の東西でそれぞれ利用していたと言われている。一帯で唯一砂浜を形成している箇所が地元では「マブニンメー海（摩文仁の前海）」と言われる浜で、摩文仁集落のチンガーを横に緩やかな参道を通して浜に降りる。海岸には転石する岩と礁池（イノー）、沖のリーフからなり、これらと対岸の浸食海岸崖が癒しの景観を醸し出している。今回の調査対象となったハンタ原遺跡は、チンガーから直線で66mに位置している。

② 歴史的背景

本遺跡がある字摩文仁は、古くは島尻摩文仁間切に属し、旧摩文仁村（現米須・伊原・大度・摩文仁の4集落からなる）の中心地であった。第二次世界大戦の終焉の地となった。同大戦により人口が激減したため、1946年（昭和21年）4月1日、摩文仁村・真壁村・喜屋武村の三村が合併、三和村となった。1961年10月1日には三和村・高嶺村・兼城村・糸満町の三村一町が合併し、糸満町字摩文仁となった。10年後の1971年（昭和46年）糸満町の市制移行に伴って糸満市が誕生し、糸満市字摩文仁となり現在に至っている。

調査対象となったハンタ原遺跡周辺には、摩文仁平和祈念公園内に所在するグスク時代の高摩文仁グスクと摩文仁遺跡、集落北側に位置する近世のタナケナ原古屋敷跡、旧具志頭村との境界に接するハガー原グスク、本遺跡西側台地上の平原遺物散布地などが所在する。これらの遺跡は比較的新しい



第2図 遺跡の位置

グスク時代以降の遺跡がほとんどであり、ハンタ原遺跡と相対する時代の遺跡は今のところ確認されていない。しかし、本遺跡の位置する台地南側海岸において干潮時のリーフ上で千枚岩質粘板岩を素材とする比較的大型の打製石斧の完形が岩に張り付いたかたちで確認されている。同石斧については、張り付く岩から取り上げていないため詳細は不明ではあるが、形状は野国貝塚等で検出されている石斧に近似しており、本石斧を搬出した遺跡が海食崖上部台地に埋蔵されている可能性がある。

本遺跡発掘期間中、調査対象となった岩影前方において表面踏査を実施した。現状は、幅の狭い平坦面が幾段かつながって海岸に降りる階段状の地形で、3～5 m大の岩が点在している。表土にクチャが露呈したところがあって、大雨等によって一時的に水が流れたと思われる水路跡が見られた。表採資料として後期系の土器胴部片が数点採取されたが、木々の繁殖と腐葉土の堆積に遮られて遺物包含層の発見までは至っていない。本地区は水、食料採取の場となる海があるなど遺跡の立地する好条件をそなえており、詳細調査の必要な地区である。 (湖城)

第Ⅱ章 調査の内容

第1節 調査の概要

1. 遺跡の立地と概要

摩文仁ハンタ原遺跡は、糸満市南東端の海岸近くの海食崖下に形成される岩陰遺跡である。本遺跡は、海岸段丘が次第に高さを増しながら北側にある標高 48 m～73 m前後の琉球石灰岩丘陵へと続く斜面の途中にある。

本遺跡が立地する海岸付近は、1945年の沖縄戦当時、撤退する日本軍と戦禍を避けようとする一般住民とが悲劇的最期を遂げた場所でもあり、現在では沖縄戦跡国定公園内に指定され遺跡周辺には多くの慰霊碑が建立されており、本遺跡発見の端緒もその歴史的経緯による。

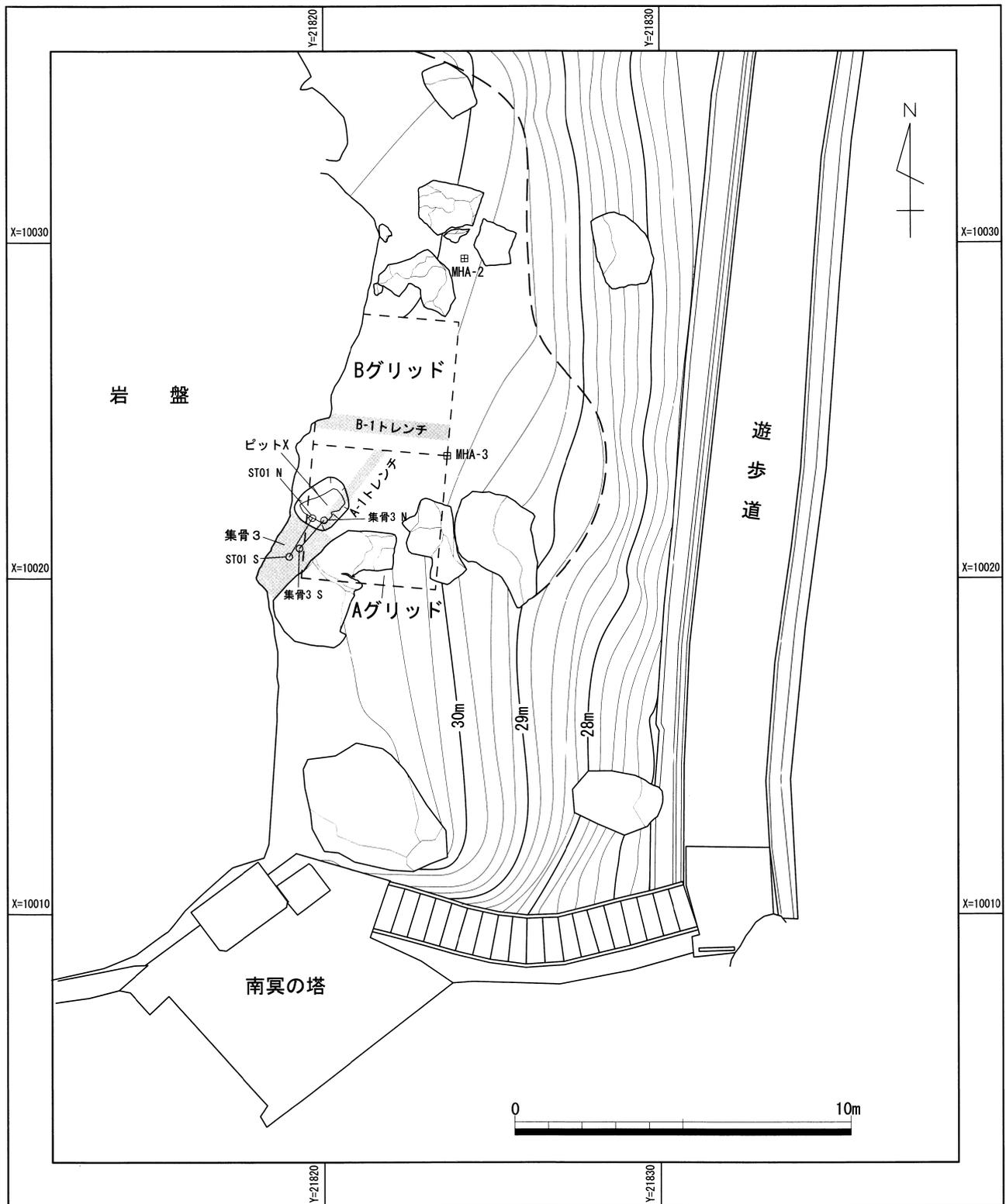
摩文仁ハンタ原遺跡は標高 50 m前後の海食崖下に立地し、標高 30 m前後の琉球石灰岩下の岩陰部とその前庭部から構成される。先述したとおり本遺跡は現在では戦跡公園内となっていることから、付近には各慰霊碑に続く遊歩道が整備されている。今調査地は遊歩道から 3 m前後の斜面上部の平坦面に位置する。

今調査地は平坦面とその南側岩陰部分であり、調査面積は約 5 m²である。 (大城)

2. 調査方法と調査の概要

1) 第1次調査 (2007年度調査)

調査区は崖下岩陰部分の平場部分である。調査にあたっては、まず草木を伐採した後、石灰岩転石等を除去し、作業スペースを確保し、南北方向に縦横 4 m四方のグリッドを設定した。南側の 4 m四方を「Aグリッド」、北側の 4 m四方を「Bグリッド」として、発掘調査をおこなった。前者には遺骨収集坑が含まれる。「Bグリッド」を、南側に 50 cmのベルトを残して、掘り下げをはじめた。このベルトの中央付近から人骨破片がまとまって検出された。「Bグリッド」では表層から骨片や貝製品が検出されたが、その層はかなり薄いことが判明したので、「Bグリッド」での掘り下げを止めて、岩陰前庭の堆積層を確認するために、開口部から奥へ向かう細長いトレンチ (Bグリッド第1トレンチ) を設定して、層位を確認することにした。また、遺骨収集坑を「ピットX」とし、埋土を掘り上



第3図 摩文仁ハンタ原遺跡 調査地平面図

げた。この排土の中から完形のゴホウラ製貝輪 1 個やそのほか貝製品を収集した。

次いで、人骨集積が「ピットX」の北側にどれくらい延びているかを確認するために、「ピットX」から「Bグリッド」へ向けて幅40cmのトレンチを開けた（Aグリッド第1トレンチ）。Bグリッドでは、人骨や遺物が岩陰の北側には広がっていないと予想されたので、「Bグリッド」での掘り下げはおこなわないことにし、Aグリッド第1トレンチで層位を確認しながらAグリッドを掘り下げていくことにした。同時に遺骨収集坑（ピットX）の南側には人骨の堆積層が確認されていたので、これより南側の掘り下げをおこなった。Aグリッドでは2ヶ所で人骨の集積を確認したが（北側を「集骨1」、南側を「集骨2」と呼称）、この2ヶ所の堆積は薄いものであった。またAグリッドの東に存在する大岩の陰にも人骨を確認したので、これを「集骨4」とした。各グリッドでは10cm単位ごとに掘り下げ、集骨が検出されてからは人骨の取り上げと並行して、人骨周辺土を3mmの篩にかけて、微細遺物の回収をおこなった。

2007年と08年の2ヶ年の調査で、人骨や遺物が集中しているのは遺骨収集坑（ピットX）より南側であり、遺骨収集坑はこの集骨の北端にあたることが判明した。この人骨と遺物が集中している地区を「集骨3」とした。この地区の最上層部は後述しているように一次葬の跡と考えられるので、「ST-01」という遺構番号を付した。

2) 第2次調査（2008年度調査）

第2次調査では遺骨収集坑（ピットX）の南側で人骨が最も集中している箇所を掘り下げ、人骨を取り上げた。また、同時にAグリッド第1トレンチ周辺の精査をおこない、人骨と遺物を発掘した。しかし、人骨の堆積が予想以上に厚く、調査期間内に人骨堆積層の最下部に達することはできなかった。2009年に第3次調査をおこなうことにした。（松下孝幸・大城一成）

第2節 層序

調査地は、琉球石灰岩崖下岩陰部の平坦面で、表面には上方崖部からの落石や転石が点在している状況であった。

層序はAグリッド第1トレンチ東壁とBグリッド第1トレンチ南壁を基本とした。確認された層序はAグリッドで4層、Bグリッドで5層であるが、Bグリッドでは第Ⅲ層以下は無遺物層のようである。以下、グリッド別に記述する。

○Aグリッド第1トレンチ東壁層序

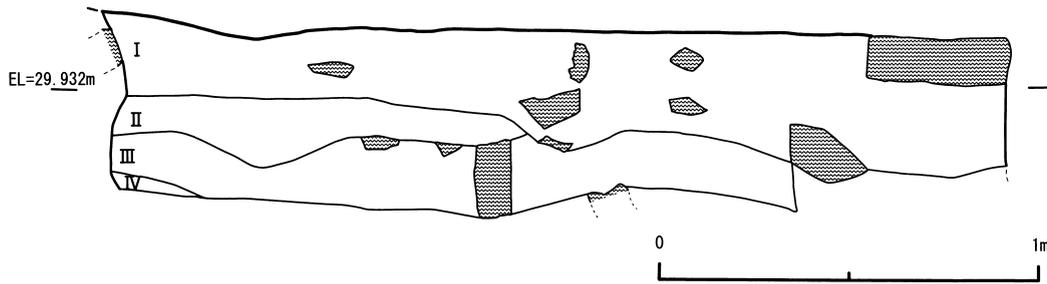
第Ⅰ層—表土層である。色調は、にぶい黄褐（Hue10YR5/4）を呈し、人骨を含む層である。土の

しまりは悪く、径10～20cmの石灰岩礫を含む。層厚は15～35cmでほぼ水平に堆積する。

第Ⅱ層—色調は、黄褐（Hue10YR5/6）を呈する。Ⅰ層に比べて土のしまりは良く、北側から中央付近にかけて堆積し、層厚は10～20cmである。

第Ⅲ層—色調は、明黄褐（Hue10YR6/6）を呈する。径2～3cmの小石を含み、土のしまりは悪い。層厚は10～20cmでほぼ水平に堆積する。

第Ⅳ層—色調は、黄褐（Hue2.5Y5/4）を呈する。土のしまりが良い。層厚は5cmで北壁端部にみられる。調査日程上、本層以下は未発掘である。



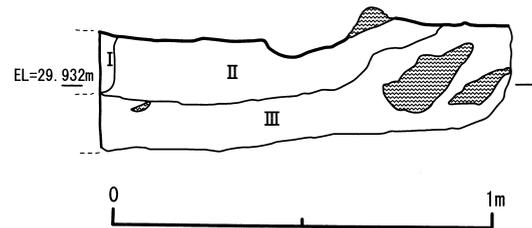
第4図 Aグリッド第1トレンチ東壁層序

○AグリッドピットX南壁層序

第I層—色調は、にぶい黄褐 (Hue10YR5/4) を呈する。層厚は20cmで、東壁側にのみみられる。

第II層—色調は、黄褐 (Hue10YR5/6) を呈する。土の粘質はなく、層厚は3～20cmである。西側から東側にかけて緩やかに傾斜する。

第III層—色調は、褐 (Hue10YR4/4) を呈し、径10～30cmの石灰岩礫を含む。貝や人骨を大量に含み、土はやや粘質でしまりがある。層厚は10～30cmで、西側から東側にかけて層厚を減ずる。調査日程上、本層以下は未発掘である。



第5図 AグリッドピットX南壁層序

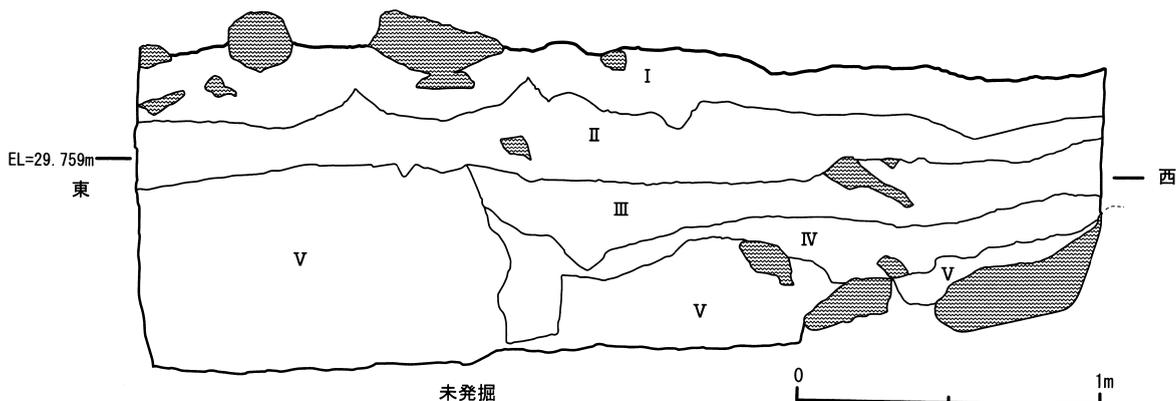
○Bグリッド第1トレンチ南壁層序

第I層—表土層である。色調は、にぶい褐 (Hue7.5YR5/4) を呈する。粘土質で土はしまりが悪い。人骨や貝製品を含み、層厚は10～30cmでほぼ水平に堆積する。表面には人骨や貝製品に混在して、グスク時代から近世にかけての陶磁器が散見できる。

第II層—遺物包含層である。色調は、褐 (Hue7.5YR4/4) を呈する。人骨の出土する層で、第I層よりも粘土質が強く小礫混じりである。層厚は10～30cmで、ほぼ水平に堆積する。

第III層—無遺物層である。色調は、褐 (Hue7.5YR4/4) を呈する。礫混じりで、やや粘土質である。層厚は10～30cmで、Bグリッド中央付近から以西にかけてほぼ水平に堆積する。

第IV層—無遺物層である。色調は、にぶい黄褐 (Hue10YR5/4) を呈する。粘土質で、層厚は3～50cmである。本層も第III層と同様にBグリッド中央から以西にかけて堆積する。



第6図 Bグリッド第1トレンチ南壁層序

第V層—無遺物層である。色調は、褐(Hue7.5YR4/4)を呈する。粘土質で層厚は3～70cmである。

調査日程上、本層以下は未発掘である。東側にかけて順次層厚を増してゆく。(大城)

第3節 遺構

岩陰南端において石で囲まれた部分から幼児骨が出土した。第5節で詳述しているように四肢骨の大部分は攪乱状態で検出されたが、頭蓋と左側肋骨および鎖骨は埋葬状態を保っていた。またこの区画から検出された人骨は4歳ぐらいの幼児骨のみで、人骨の出土状況からこの場所は幼児の一次埋葬場所と推測される。この幼児骨の周辺には転石が残存しており、この岩塊の位置と人骨の配置から推測して、これは石囲墓であろう。(松下孝幸)

第4節 遺物

A 人工遺物

2007年(第1次調査)と2008年(第2次調査)の両年に亘る調査で得られた人工遺物は、土器、石器、貝製品、骨製品、チャート片及び陶磁器で出土数は232点である。その中でも特筆されるべきは、貝製品である。貝製品の出土数は186点と人工遺物の約80%を占め、貝輪、線刻有孔貝製品、シャコガイ製有孔異形板状製品、白玉、小玉、タカラガイ製品、貝珠、札状製品、タカラガイ札状製品、巻貝製品、巻貝有孔製品、二枚貝有孔製品、有孔貝製品及びヤコウガイ製品の14種が確認できた。以下順に、土器片30点、陶磁器6点、骨製品5点、石器3点、チャート片2点と続くが、陶磁器については本遺跡と直結しないことから今回は報告を省略する。

遺物の記述等については基本的に集骨ごとに行い、次いでAグリッド、ピットX、ST-01、Bグリッド、表採等の順に記している。

なお、土器の色調等については以下に依った。

○農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖 2005年版』日本色研事業株式会社 2004年2月

1. 集骨1関連遺物(第8図1～第8図21)

集骨1関連の人工遺物は貝製品に限られ、出土数は22点である。内訳は、白玉15点、小玉1点、タカラガイ製品6点である。

○白玉(第8図1～第8図15)

白玉としたものは、巻貝の殻頂近くを研磨によって平坦に整形するものである。平面観は中空の円形をなし、断面観はその形状から2種に大別できる。一つは研磨の度合によってほぼ扁平となるものと、もう一つは、一方が他方より厚さを減ずるために傾斜するものであり、本報告ではこれを三角形状と表現した。第1表にその観察結果を示した。

○小玉

小玉としたものは、巻貝の螺塔部を利用するもので、螺塔部長軸に直交して平坦に研磨するものである。集骨1では1点のみ得られた。

第8図16は小形巻貝の殻頂部を利用するもので、頂部を平坦に研磨して外側から孔を穿っている。全体的に手撫で様の磨滅がみられる。法量は長径0.76cm、短径0.64cm、孔径0.12cm、殻高0.35cm、

重量 0.2g である。

○タカラガイ製品（第 8 図 17 ～第 8 図 21）

集骨 1 では 6 点得られたが、ここでは良好な資料 5 点を図化した。すべて小形のハナビラダカラガイの背面部を除去して、孔を穿って孔唇部を平坦にするものである。第 2 表にその観察結果を示した。

第 1 表 集骨 1 出土白玉観察表

図版番号	法量（径・厚cm、重量 g）					備考
	直径	孔径	最小厚	最大厚	重量	
第 8 図 1	0.63	0.21	0.08	0.09	-	完形。断面観は扁平。
第 8 図 2	0.72	0.26	0.11	0.13	0.1	完形。断面観は扁平。
第 8 図 3	0.83	0.25	0.09	0.14	0.14	完形。断面観は三角形状。
第 8 図 4	0.85	0.37	0.08	0.11	0.11	完形。断面観は扁平。
第 8 図 5	0.86	0.45	0.10	0.14	-	完形。断面観は扁平。
第 8 図 6	0.86	0.22	0.10	0.14	0.18	完形。断面観は扁平。
第 8 図 7	0.97	0.36	0.10	0.07	0.15	完形。断面観は扁平。
第 8 図 8	0.86	0.36	0.05	0.12	0.10	完形。断面観は三角形状。
第 8 図 9	0.80	0.36	0.05	0.10	0.10	完形。断面観は扁平。
第 8 図 10	0.87	0.26	0.07	0.14	0.15	完形。断面観は三角形状。
第 8 図 11	0.77	0.32	0.07	0.09	0.08	完形。断面観は扁平。
第 8 図 12	0.85	0.33	0.07	0.08	0.10	破損。断面観は扁平。
第 8 図 13	0.86	0.37	0.09	0.15	0.13	破損。断面観は三角形状。
第 8 図 14	0.88	0.03	0.08	0.09	0.12	完形。断面観は扁平。
第 8 図 15	0.87	0.38	0.06	0.09	0.10	完形。断面観は三角形状。

第 2 表 集骨 1 出土タカラガイ製品観察表

図版番号	法量（長・厚cm、重量 g）					備考
	殻長	殻径	孔長径	孔短径	重量	
第 8 図 17	1.68	1.22	1.11	0.75	1.08	孔唇部に研磨。
第 8 図 18	1.69	1.24	1.02	0.79	1.00	孔唇部に雑な研磨。
第 8 図 19	1.86	1.47	1.27	0.98	1.39	孔唇部に研磨。
第 8 図 20	1.97	1.48	1.27	0.98	1.42	左孔唇部に顕著な研磨。
第 8 図 21	2.12	1.83	1.37	1.06	2.79	孔唇部に比較的丁寧な研磨。

2. 集骨 2 関連遺物（第 8 図 22 ～第 9 図 37）

集骨 2 関連の人工遺物は貝製品 21 点、土器片 1 点、チャート片 1 点の計 23 点である。貝製品の内訳は貝輪 1 点、線刻有孔製品 1 点、白玉 5 点、小玉 1 点、タカラガイ製品 8 点、貝珠 5 点である。

○線刻有孔製品

第 8 図 22 は、クロミナシガイ製の線刻有孔製品である。先端と基部の一部を欠損するもののほぼ全形を窺える資料である。体部中央の 4 条一組の横位の線刻を境にして上下に区画される。両縁には上下 2 ヶ所の孔が外側から穿かれている。先述の横位の線刻は両孔間に延びる。上下の文様は対称性を持ち、3 ～ 6 条一組の線刻を放射状に施している。計 4 ヶ所の孔には、いずれも紐ずれ様の磨滅が孔周縁にみられる。裏面の殻口周辺には手撫で様の磨滅がみられる。法量は長さ 5.3 cm、幅 3.9 cm、

重量 14.5g である。

○白玉（第 8 図 23 ～第 8 図 27）

集骨 2 では 5 点得られている。観察結果は次表のとおりである。

第 3 表 集骨 2 出土白玉観察表

図版番号	法量（径・厚cm、重量 g）					備 考
	直径	孔径	最小厚	最大厚	重量	
第 8 図 23	0.80	0.26	0.04	0.07	0.06	完形。断面観は三角形状。
第 8 図 24	0.84	0.25	0.13	0.15	0.19	完形。断面観は扁平。
第 8 図 25	0.74	0.27	0.07	0.09	0.07	完形。断面観は扁平。
第 8 図 26	0.75	0.27	0.06	0.10	0.09	完形。断面観は三角形状。
第 8 図 27	0.60	0.30	0.11	0.13	0.05	完形。断面観は扁平。

○小玉

第 8 図 28 は完形品である。微細な巻貝の殻頂付近を利用したもので、頂部に外側と内側から孔を穿っている。外面は全面にわたって丁寧な研磨が施されている。法量は殻長 0.35cm、殻径 0.50cm、孔径 0.16cm、重量 0.11g である。

○タカラガイ製品

本製品は 8 点得られているが、比較的良好な 6 点について図化した。観察結果は次表のとおりである。

第 4 表 集骨 2 出土タカラガイ製品観察表

図版番号	法量（長・厚cm、重量 g）					備 考
	殻長	殻径	孔長径	孔短径	重量	
第 8 図 29	1.97	1.42	1.25	0.9	1.60	孔唇部に雑な研磨。
第 8 図 30	1.80	1.35	1.33	0.98	1.00	孔唇部に丁寧な研磨。
第 8 図 31	1.86	1.27	1.35	0.93	0.94	孔唇部に丁寧な研磨。
第 8 図 32	1.92	1.47	1.31	0.94	1.44	孔唇部に丁寧な研磨。
第 8 図 33	1.82	1.41	1.31	0.96	1.28	孔唇部に丁寧な研磨。
第 8 図 34	1.61	1.24	1.12	0.76	1.00	孔唇部に丁寧な研磨。

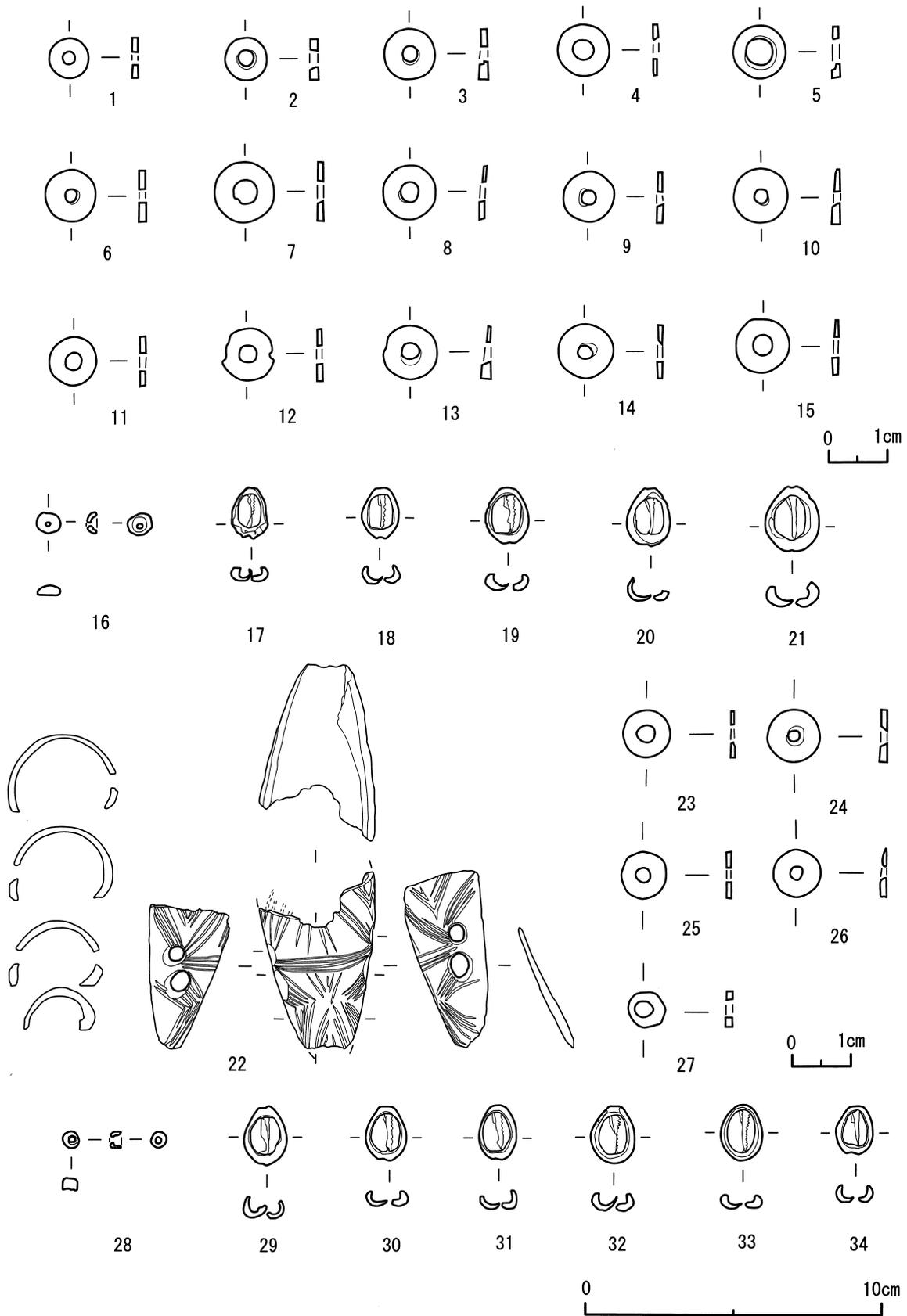
○貝珠

ツノガイの体層部を利用するものである。貝表面は研磨が施されるようであるが自然面を払拭するまでには至らない。上下端とも切断面は波状の凹凸のままであるが、両端とも研磨が施されていることから完形品と考えられる。5 点出土しているが、ここでは特徴的な 2 点について図化した。

第 9 図 35 はツノガイの体層部を利用するもので、完形品である。両端とも研磨が施されるが、図 36 に比して整形にやや雑な感を受ける。表面には特に研磨はみられない。法量は長さ 1.87cm、幅 0.76cm、重量 0.77g である。

第 9 図 36 はツノガイの体層部を利用するもので、完形品である。上下端とも研磨が施されるものであるが、上端が丁寧に研磨され、体層がほぼ平坦に整形されるのに対して、下端の研磨はやや粗雑で体層は波状を残したままである。表面は研磨が施されるようであるが判然としない。法量は長さ 1.62cm、幅 0.80cm、重量 0.76g である。

○貝輪



集骨1 (白玉No. 1~No. 15、小玉No. 16、玳瑁製品No. 17~21)

集骨2 (線刻有孔製品No. 22、白玉No. 23~27、小玉No. 28

玳瑁製品No. 29~34)

第7図 遺物実測図1 (第4図版)

第9図37はメンガイ製貝輪の完形品で、1点のみ得られた。平面観は楕円状をなす。表面は自然面を残し、外周縁及び孔唇部には研磨が施されるが徹底しておらず、両縁とも波状の凹凸がある。保存状態は良好である。法量は殻長7.68cm、殻径7.00cm、孔長6.03cm、孔径5.34cm、重量17.81gである。集骨2下層出土。

3. 集骨3関連遺物（第9図38～第10図58）

集骨3関連の人工遺物は貝製品22点、骨製品3点、土器片18点、石器1点、チャート片1点の計45点である。貝製品の内訳は貝輪10点、シャコガイ製有孔異形板状製品1点、白玉3点、小玉2点、タカラガイ製品1点、貝珠1点、巻貝有孔製品3点、ヤコウガイ製品1点である。骨製品の内訳はサメ脊椎製品1点、サメ歯有孔製品2点である。

○土器

第9図38は大山式土器の口縁部片である。小破片のため推算口径は不明である。口唇部を平坦に整形し、幅広に肥厚させるもので、口縁外面に幅約3.6mmの単篋による押捺刻文を施す。器色はにぶい赤褐（Hue5YR4/4）を呈し、器表面は石灰分が付着するため基面調整等は不明瞭である。胎土は泥質で、チャートや砂粒等の碎片を混入する。焼成は脆弱である。

第9図39は推算口径13.6cmの鉢形土器の口縁部片である。胴部から緩やかに膨らみながら口縁を外反させる器形で、口唇は舌状を呈する。器面調整は内外ともナデ調整が施されるが徹底しておらず、口縁の内外面には指圧痕と外面胴部には幅約1cmの単篋による調整痕が消えきらずに残っている。器厚は0.5～0.8cm。器色は内面の一部がにぶい黄橙（Hue10YR7/4）を帯びる以外は橙（Hue2.5YR6/6）を呈する。焼成は良好である。

○貝輪

第9図40はメンガイ製有孔貝輪の破損品である。表面は研磨が施されるが自然面を消し去るまでには至っていない。孔唇部は丁寧な研磨が施されており滑らかである。図右側上端の破損箇所には孔の一部がみえ、表裏から孔が穿かれていたようで現存部分から判断する限り孔は1～2程度であったと考えられる。残存重量は14.33gである。

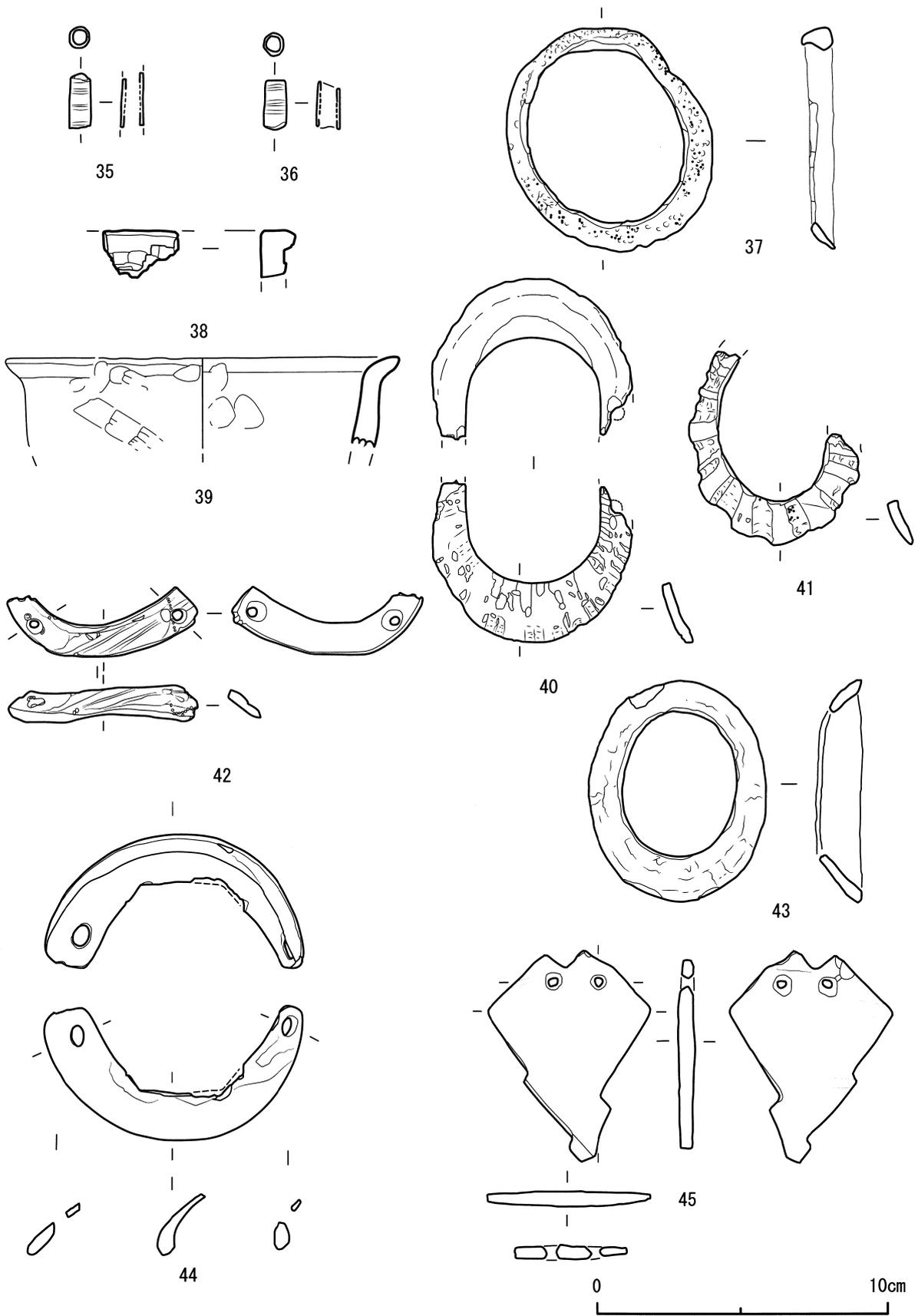
第9図41はオオツタノハ製貝輪の破損品である。螺背を打ち欠いて穿孔するもので、孔唇部には手撫で様の磨滅がみられる。螺背は放射肋のみを研磨している。残存重量は9.23gである。

第9図42はサラサバタイ製の貝輪である。左端部と右端部の一部を僅かに欠損するもののほぼ完形品である。孔唇部及び周縁には丁寧な研磨が施され、両端近くには両側から各々1孔を穿つ。法量は長さ6.51cm、幅1.64cm、右孔径0.39cm、左孔径0.31cm、重量は7.35gである。

第9図43はオオベッコウガサガイ製貝輪の完形品である。螺背を打ち欠いて穿孔するものである。孔唇部には手撫で様の磨滅がみられる。法量は長さ7.55cm、幅6.06cm、孔長径5.05cm、孔短径4.00cm、重量は17.00gである。

第9図44はサラサバタイ製貝輪の破損品であるが、ほぼ全形を窺える資料である。周縁には手撫で様の磨滅がみられる。両端部には両面から穿かれた紐ずれ痕が残る孔が各々みられる。法量は長さ8.88cm、幅2.43cm、孔長径0.58cm、孔短径0.55cm、重量23.34gである。

○シャコガイ製有孔異形板状製品



集骨2 (貝珠No. 35, 36) 集骨2下層 (貝輪No. 37)
 集骨3 (土器No. 38, 39、貝輪No. 40~44
 シャコイ製有孔異形板状製品No. 45)

第8図 遺物実測図2 (第5図版)

第9図45はシャコガイの蝶番近くを利用したもので、製品の外縁を段状に整形する。全面にわたって丁寧な研磨を施し、上端近くには両面から穿孔された紐ずれ痕がみられる二組の孔を有する。法量は長さ7.19cm、幅5.60cm、重量27.96gである。

○白玉（第10図46～第10図48）

集骨3では3点得られた。観察結果は第5表のとおりである。

第5表 集骨3出土白玉観察表

図版番号	法量（径・厚cm、重量g）					備考
	直径	孔径	最小厚	最大厚	重量	
第10図46	0.60	0.34	0.09	0.15	0.07	完形。断面観は三角形状。
第10図47	0.47	0.22	0.14	0.15	0.05	完形。断面観は扁平。
第10図48	0.62	0.28	0.06	0.07	0.01	完形。断面観は扁平。

○小玉

第10図49はアジロイモガイの螺塔部を利用したもので、完形品である。頂部に外側から孔を穿がっている。全体的に研磨が施されるもののやや粗い。法量は殻高0.84cm、殻径1.60cm、孔径0.28cm、重量1.60gである。

第10図50はマガキガイの螺塔部を利用したもので、完形品である。頂部に外側から孔を穿がっている。全面にわたって丁寧な研磨がほどこされている。法量は殻高1.03cm、殻径2.17cm、孔径0.44cm、重量4.80gである。

○タカラガイ製品

集骨3では1点のみ得られた。観察結果は第6表のとおりである。

第6表 集骨3出土タカラガイ製品観察表

図版番号	法量（長・厚cm、重量g）					備考
	殻長	殻径	孔長径	孔短径	重量	
第10図51	1.88	1.30	1.33	0.91	1.16	孔唇部丁寧な研磨。

○貝珠

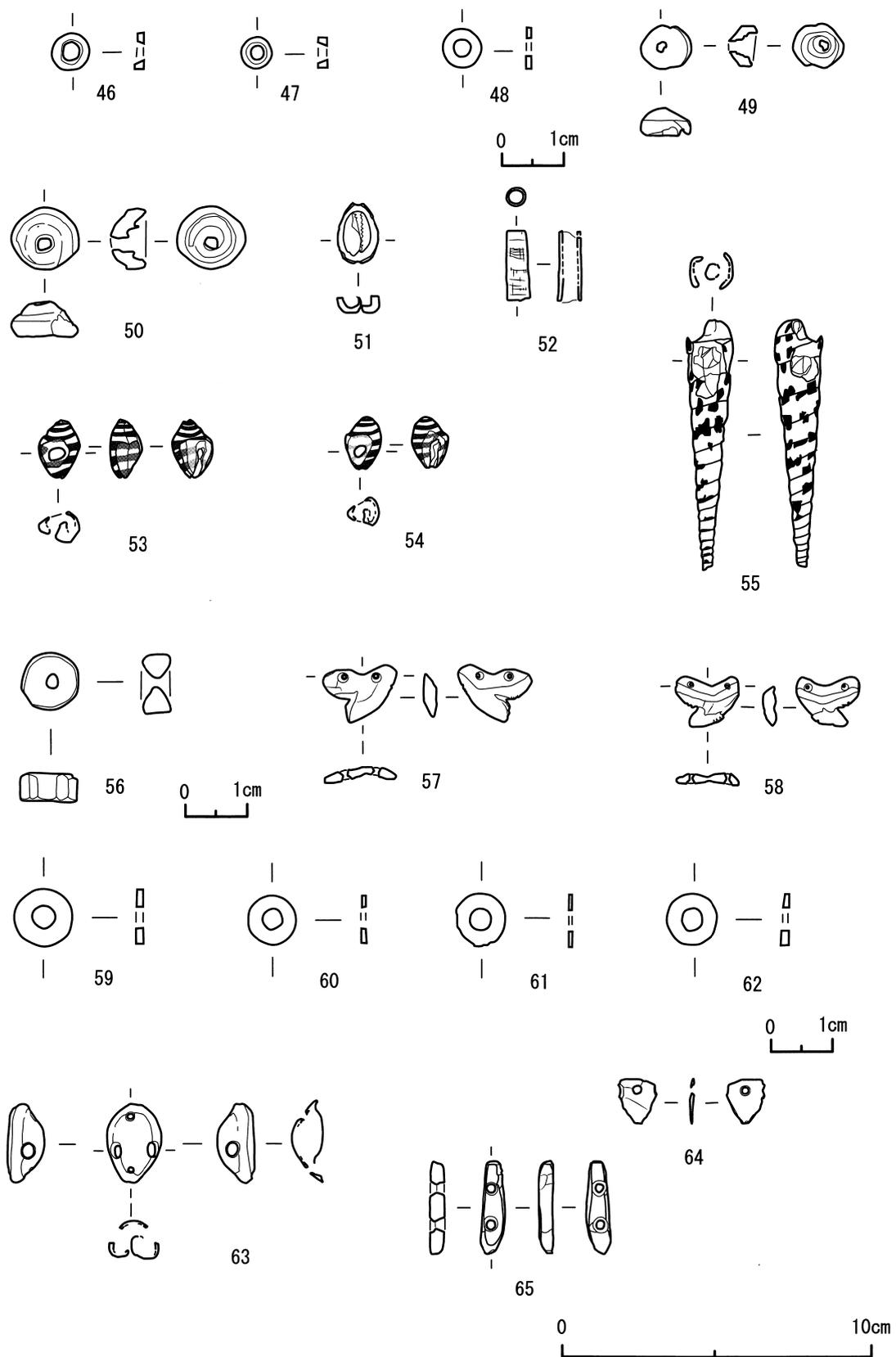
第10図52はツノガイの体層部を利用するもので、上端を一部欠損するもののほぼ完形品である。上下端とも平坦に研磨されるが、上端がより丁寧である。表面には研磨等の加工は特にみられない。法量は長さ2.28cm、幅0.76cm、重量1gである。

○巻貝有孔製品

第10図53はノシガイの螺背を水平に研磨して穿孔するもので、孔唇部はやや雑な研磨が施され、同様な研磨は殻頂と螺腹から外唇にかけてもみられる。加工途中のものとも思われるが、集骨に伴うことから製品と判断した。法量は長さ1.83cm、幅1.27cm、重量1.82gである。

第10図54は同図53と同様にノシガイの螺背と螺腹を水平に研磨して孔を穿つものである。孔唇部に特に紐ずれ痕等はみられない。法量は長さ17.51mm、幅11.80mm、重量は1.56gである。

第10図55はタケノコガイ製品のほぼ完形品である。螺腹と螺背に各々1孔を穿ち、周辺に粗い研磨を施すものである。孔周縁には紐ずれ痕等はみられない。法量は長さ8.0cm、幅0.3～1.5cm、重



集骨3 (白玉No. 46~48、小玉No. 49、50、幼カクイ製品No. 51
 貝珠No. 52、巻貝有孔製品No. 53~55、ササ椎製品No. 56
 カク歯有孔製品No. 57、58)
 集骨4 (白玉No. 59~62) アクリット (巻貝有孔製品No. 63
 有孔製品No. 64、イソシ有孔製品No. 65)

第9図 遺物実測図3 (第6図版)

量 8.79g である。

○サメ脊椎製品

第 10 図 56 はサメの脊椎中心部に両面から孔を穿つもので、周囲には粗い研磨が施される。法量は高さ 0.43cm、径 0.89cm、孔径 0.2cm、重量 0.29g である。

○サメ歯有孔製品

第 10 図 57 はイタチザメの歯を利用したものである。歯根部に両側から 2 孔を穿っている。研磨痕は裏面の歯根部の 2 孔下に横位方向のものが、歯冠の屈曲部に両面からの斜位のものが顕著である。法量は長さ 1.71cm、幅 2.40cm、孔径 0.2cm、厚さ 0.04cm、重量 1.76g である。

第 10 図 58 もイタチザメの歯を利用したものである。歯根部の両端近くに各々 1 孔を両側から穿かれている。孔以外に特に加工痕はみられない。法量は長さ 3.07cm、幅 1.73cm、孔径 0.02cm、厚さ 0.05cm、重量 2.46g である。

4. 集骨 4 関連遺物 (第 10 図 59 ~ 第 10 図 62)

○白玉

集骨 4 関連の人工遺物は白玉 4 点のみである。観察結果は次表のとおりである。

第 7 表 集骨 4 出土白玉観察表

図版番号	法量 (径・厚cm、重量 g)					備考
	直径	孔径	最小厚	最大厚	重量	
第 10 図 59	0.94	0.34	0.10	0.14	0.17	完形。断面観は三角形状。
第 10 図 60	0.76	0.32	0.05	0.08	0.08	完形。断面観は扁平。
第 10 図 61	0.83	0.36	0.03	0.05	0.04	完形。断面観は扁平。
第 10 図 62	0.81	0.37	0.08	0.12	0.10	完形。断面観は三角形状。

5. A グリッド関連遺物 (第 10 図 63 ~ 第 10 図 65)

A グリッド関連の人工遺物は貝製品 6 点、イノシシ有孔製品 (骨製品) 1 点の計 7 点である。貝製品の内訳は白玉 3 点、札状製品 1 点、巻貝有孔製品 1 点、有孔製品 1 点である。ここでは特徴的な遺物である巻貝有孔製品、有孔製品、イノシシ歯有孔製品について記述する。

○巻貝有孔製品

第 10 図 63 はハナビラダカラの殻上に対称的に 4 孔を配するものである。いずれも外側から穿孔されているが、紐ずれ痕はみられず、孔以外の加工はみられない。法量長さ 2.54cm、幅 1.77cm、重量 3.65g である。

○有孔製品

第 10 図 64 は二枚貝 (種不明) の剥片を利用したもので完形品である。平面観は略三角形状を呈し、裏側から穿孔するものである。周縁には微細な調整痕がみられる。法量は長さ 1.38cm、幅 1.2cm、孔径 0.13cm、厚さ 0.11cm、重量は 0.45g である。

○イノシシ歯有孔製品

第 10 図 65 はイノシシの歯を利用したものである。歯根部に両側から 2 孔を穿かれ、全面に亘って研磨が施されている。法量は長さ 3.02cm、幅 0.74cm、上孔径 0.32cm、下孔径 0.34cm、厚さ 0.425cm、重量 0.98g である。

6. ピットX関連遺物（第11図66～第11図67）

ピットX関連の人工遺物は貝製品5点、サメ歯有孔製品（骨製品）1点、石器1点の計7点である。貝製品の内訳は白玉1点、タカラガイ製品3点、貝珠1点である。ここではサメ歯有孔製品と石器について記述する。

○サメ歯有孔製品

第11図66はホオジロザメの歯を利用した製品で完形品である。歯根部に1孔を有するもので、両側から穿孔されている。歯根部には横位、歯冠部のほぼ全面には横位及び斜位の研磨痕がみられる。歯冠両縁の鋸歯はこの研磨のためにほぼ消失している。法量は長さ3.07cm、幅1.73cm、孔径0.20cm、厚さ0.53cm、重量2.46gである。

○石斧

第11図67は砂岩製石斧で平面観は撥形をなし、断面は楕円形を呈するほぼ完形品である。使用痕等はみられないが、全面に亘って火を受けたとみられ、概ね赤（Hue7.5YR4/6）の色調を帯びる。

7. ST-01 関連遺物（第11図68～第11図71）

ST-01 関連の人工遺物は貝製品3点、土器片1点、石器1点の計5点である。貝製品の内訳は白玉2点、札状製品1点である。ここでは白玉、石器及び遺構に伴った土器について記述する。

○白玉

本遺構では2点得られた。観察結果は次表のとおりである。

第8表 ST-01 出土白玉観察表

図版番号	法量（径・厚cm、重量g）					備考
	直径	孔径	最小厚	最大厚	重量	
第11図68	0.78	0.27	0.09	0.11	0.10	完形。断面観は三角形状。
第11図69	0.80	0.32	0.05	0.06	0.06	完形。断面観は扁平。

○石斧

第11図70は刃部及び裏面を欠く資料である。剥離調整後に研磨を施すようであるが、所々に自然面を残している。側面は敲打調整後に入念な研磨が施されている。石質は未同定。残存法量は長さ7.10cm、幅3.19cm、重量32.98gである。

○土器

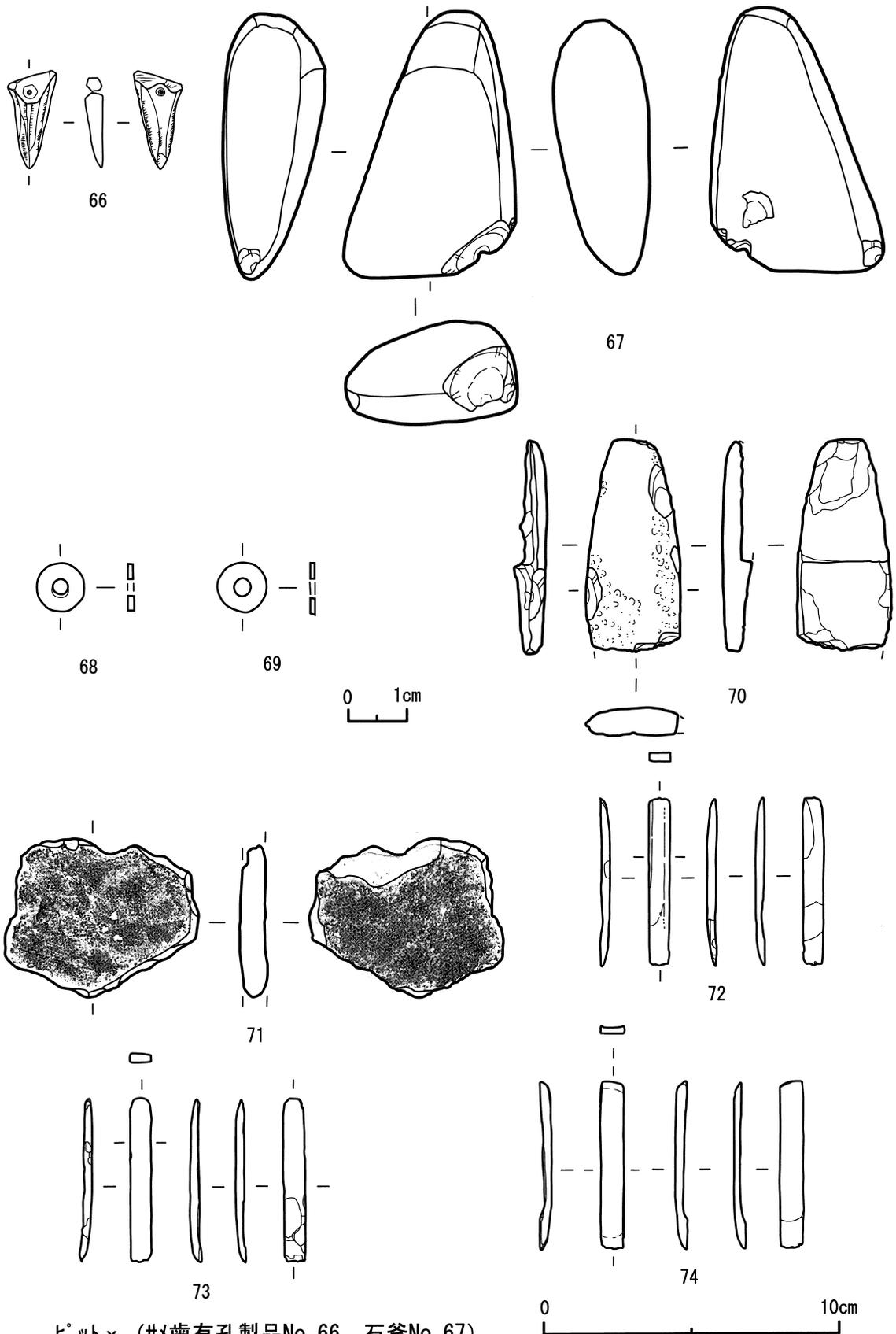
第11図71はST-01に伴うもので、後期土器の胴部片である。小破片のため文様の有無及び器形等は不明である。指圧による調整後、単篋工具等でナデ調整が施されている。器色は外面がにぶい橙（Hue5YR6/4）、内面は黒（Hue10YR2/1）を呈する。器厚は0.5～0.9cm。胎土は精選され、混和材として石英微細粒、チャート微細粒、黒色鉱物微細粒等を含む。焼成は良好である。

8. Bグリッド関連遺物（第11図72～第11図74）

Bグリッド関連の人工遺物は貝製品5点のみである。内訳は貝輪1点、白玉1点、札状製品3点である。ここでは札状製品のみを図化した。

○札状製品

第11図72はイモガイ科の体層部を利用したもので、刃部の一部が欠損するもののほぼ完形品であ



ピット× (サメ歯有孔製品No. 66、石斧No. 67)
 ST01北 (白玉No. 68, 69、石斧No. 70)
 ST01伴出 (土器No. 71)
 Bグレット (札状製品No. 72~74)

第10図 遺物実測図4 (第7図版)

る。刃部は両側から、基部は表側から丁寧な研磨で整形されている他は特に加工はみられない。刃部には手撫で様の磨滅がみられる。法量は長さ 5.67cm、幅 0.79cm、厚さ 0.23cm、重量 2.92g である。

第 11 図 73 はイモガイ科の体層部を利用した製品である。全体に研磨が施され、基部の平面観は弧状を呈する。刃部は両側から丁寧な研磨が施されているが、使用によるためか一部欠損している。法量は長さ 5.50cm、幅 0.72cm、厚さ 0.24cm、重量 2.16g である。

第 11 図 74 はイモガイ科の体層部を利用した製品で、ほぼ完形品である。刃部を両側から、基部を表側からの研磨で整形している。全面に手撫で様の磨滅がみられる。基部と刃部には使用によるとみられる剥離が認められる。法量は長さ 5.56cm、幅 0.71cm、厚さ 0.29cm、重量 2.40g である。

9. 表採資料 (第 12 図 75 ~ 第 13 図 89)

表採で得られた人工遺物は貝製品 95 点、土器片 10 点、陶器 1 点、青磁 5 点の計 111 点であるが、陶器片や青磁片については当遺跡と直結しないことから今回は報告を行わない。貝製品の内訳は貝輪 25 点、白玉 1 点、小玉 31 点、タカラガイ製品 27 点、札状製品 3 点、タカラガイ札状製品 1 点、巻貝製品 2 点、二枚貝有孔製品 2 点、有孔貝製品 2 点、ヤコウガイ製品 1 点である。ここでは土器、貝輪、タカラガイ札状製品、巻貝製品、二枚貝有孔製品、有孔貝製品及びヤコウガイ製品について記述する。

○土器

第 12 図 75 は推算口径 12.2cm の深鉢形土器の口縁部片である。頸部で一旦窄まった後に口縁で外反する器形で、口唇部は平坦に整形する。器面調整は指圧による整形後にナデ調整が行われるが徹底しておらず、外面の口縁下のように指圧痕が残る部分もある。器厚は 0.9 ~ 1.0cm。器色は内外とも概ね赤橙 (Hue10R6/8) を帯びる。胎土は泥質であるが、石英やチャートの微細粒のために手触りはざらつく。焼成は良好である。

○貝輪

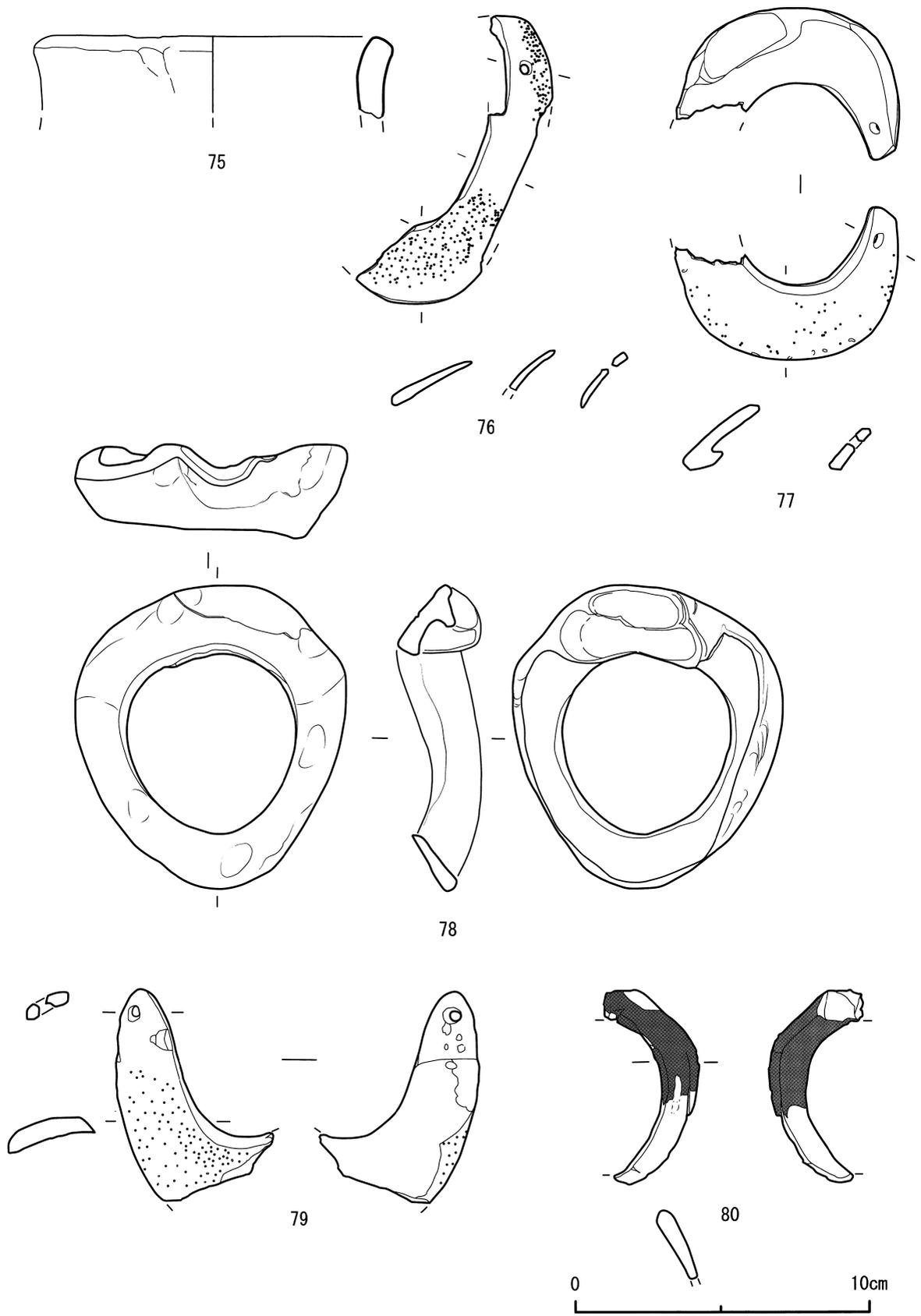
第 12 図 76 はゴホウラの螺腹部を利用した貝輪の破損品である。上端近くに内外から 1 孔を穿つ。螺腹部を打ち欠き、周縁を敲打整形後に研磨を施している。表面の一部には自然面を残す。孔径は 0.31cm を測る。

第 12 図 77 はゴホウラ螺背部利用の貝輪の破損品である。左端部を欠損する。孔唇部、螺塔内部及び周縁には丁寧な研磨を施している。右端近くには外側からの孔径 0.33cm の穿孔を有する。

第 12 図 78 はゴホウラ製貝輪の完形品である。螺背を打ち欠いて孔を穿ち、孔唇部と周縁に丁寧な研磨が施されている。外面は自然面を残すものの内面は研磨が施されている。法量は長さ 10.37cm、幅 9.17cm、孔長径 5.97cm、孔短径 5.80cm、厚さ 0.38cm、重量 111.0g である。

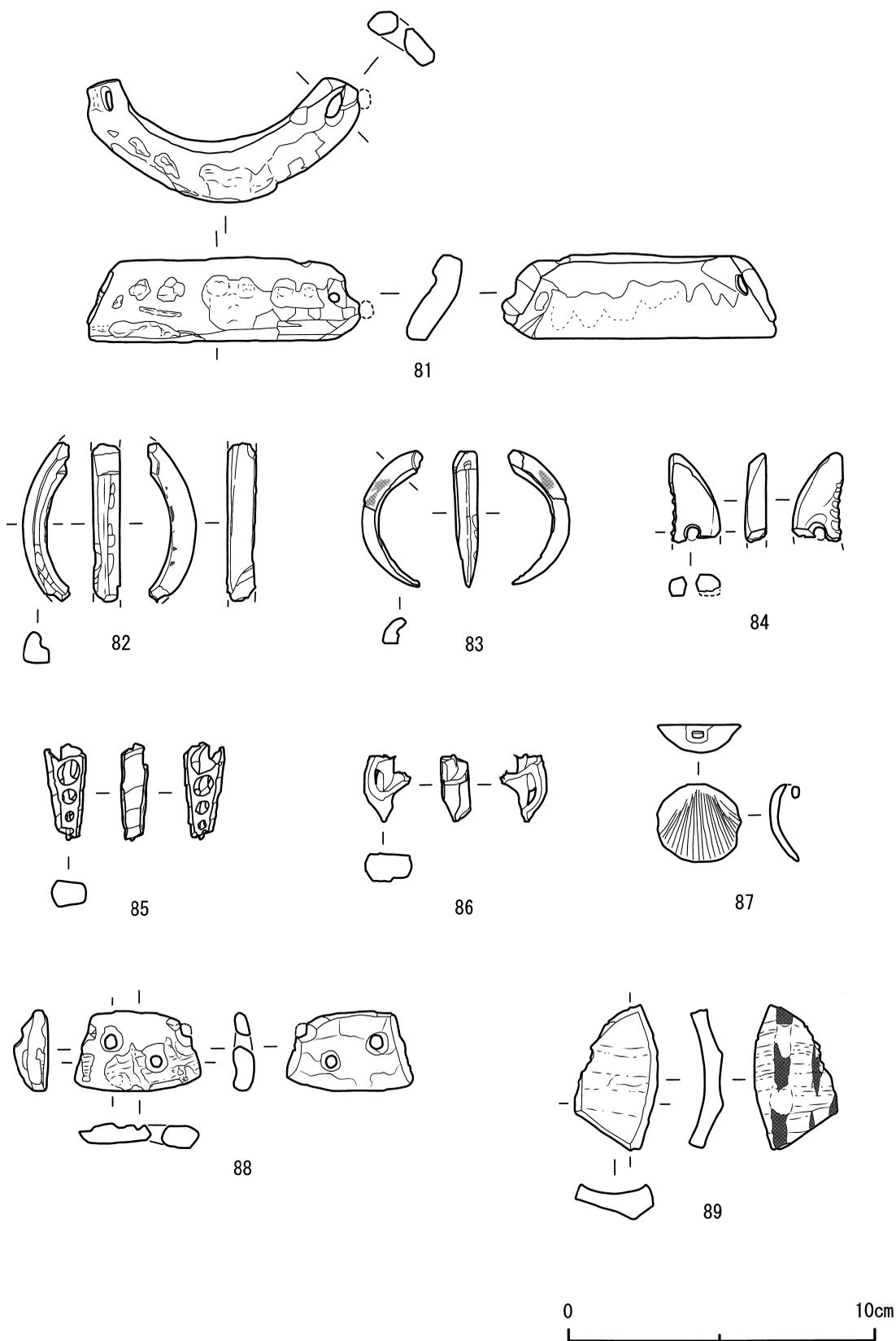
第 12 図 79 はゴホウラの螺背部を利用した貝輪の破損品で、上端近くには内外からの穿孔による径 0.35cm の 1 孔を有する。孔周辺には紐ずれ痕がみられる。螺背を打ち欠き、孔唇部及び周縁には丁寧な研磨を施している。

第 12 図 80 はゴホウラの螺背部を利用した貝輪の破損品である。孔唇部は丁寧な研磨が施されているが、火を受けたために一部が黒ずみ、被熱による収縮等で内外ともに微細な罅割れと剥落とがみられる。



表採（土器No. 75、貝輪No. 76~80）

第11図 遺物実測図5（第8図版）



表採（貝輪No. 81~83、外カ`イ札状製品No. 84、巻貝製品No. 85、86、
二枚貝有孔製品No. 87、有孔貝製品No. 88、ヤコカ`イ製品No. 89）

第12図 遺物実測図6（第9図版）

第 13 図 81 はサラサバテイ製貝輪のほぼ全形を窺える資料である。全面に亘って研磨が施され、端部には両面から穿かれた紐ずれ痕がみられる孔が残っている。法量は長さ 8.84cm、幅 2.95cm、孔長径 0.50cm、孔短径 0.45cm、厚さ 0.72cm、重量 46.78g である。

第 13 図 82 はサラサバテイ製貝輪の破損品である。貝の周縁を利用するもので、打ち欠き後に敲打調整し、丁寧な研磨で仕上げている。内面には貝特有の真珠層がみえる。

第 13 図 83 はサラサバテイの周縁を打ち欠いて研磨仕上げをするものである。一端を研磨によって尖状に整形していることから貝輪以外の用途も考えられるが、今回は本項目に含めて報告する。

○タカラガイ札状製品

第 13 図 84 はホシダカラガイの殻口周辺を打ち欠いて全面に研磨を施し、両側から穿孔するものである。研磨は丁寧であるが、タカラガイ特有の殻口の鋸歯状凹凸を除去することはないようである。

○巻貝製品

第 13 図 85 はタケノコガイ製品の破損品である。体層部に両側から丁寧な研磨を施すもので、研磨面は平坦に整形される。残存法量は長さ 3.10cm、幅 1.31cm、重量 2.36g である。

第 13 図 86 は巻貝の体層部を両側から平坦に研磨して貝の中央部のみを残すものである。残存法量は長さ 2.12cm、幅 0.85cm、重量は 1.54g である。

○二枚貝有孔貝製品

第 13 図 87 はソメワケグリガイの殻頂部を平坦に研磨し穿孔するものである。研磨は腹縁にも施されるが徹底せず、放射肋の凹凸を消し去るまでには至らない。腹縁の左右が一部打ち欠かれているが、製品製作に起因するかは不明である。法量は長さ 2.50cm、幅 2.60cm、孔径 0.30cm、重量 3.50g である。

○有孔貝製品

第 13 図 88 はサラサバテイ製の有孔貝製品でほぼ完形品である。全面に研磨を施し、上端近くに 2 孔、中央に 1 孔を両面からそれぞれ穿孔するが、右上方の孔は製品右端が破損するため、一部欠失している。右孔径は 0.37cm、左孔径は 0.42cm である。孔の周辺に紐ずれ痕がみられる。

○ヤコウガイ製品

第 13 図 89 はヤコウガイの体層部を打ち欠き周縁に研磨を施すものでほぼ完形品である。右周縁が一部欠落する。研磨以外の加工はみられない。

10. 不明資料

不明資料としたのは表採その他によって得られたもので、小玉 3 点があるが、先述したものと同種であることから記載を省略する。

B 自然遺物

海産貝、陸産貝、甲殻類破片、自然礫などの出土があるが、いずれも専門家の同定を経ていないので、同定後に改めて報告したい。(大城)

第 5 節 人骨

1. 人骨の出土状況

本岩陰の前庭では広範囲にわたって表層から人骨片や貝製品などを採集することができたが、当初

はこれらは遺骨収集によって遺構が攪乱された際に、周辺に飛散した結果であろうと推測していた。しかし、発掘調査によって、前庭を含めた岩陰全体の表層は骨片や遺物を含む薄い包含層であることがわかった。約 2000 年もの間この遺物包含層の上に土砂などが堆積しなかったことは驚きであり、また、戦後本遺跡の周辺で遺骨収集がおこなわれたにもかかわらず、今回の発見まで遺構や人骨、遺物などが保存されていたことは奇跡に近い。

岩陰の南端には岩に囲まれた箇所があり、この岩の間から人骨が検出された。この部分も表土にはほとんど覆われておらず、頭蓋の一部がすでに露出していた。人骨の検出をおこなったところ下顎骨を確認した。上肢骨と右側の下肢骨、肋骨も検出したが、これらは埋葬状態を保っていない。また、尺骨が石の下から検出された。実測終了後、人骨を取り上げる際に、埋葬された状態を保った左側肋骨と鎖骨を検出した。すなわち、頭蓋と左側肋骨および鎖骨は埋葬状態を保っていたので、本来ここには一次葬状態の人骨が残存していたと考えられるが、後世の攪乱によって、上肢骨や下肢骨が動かされてしまったものと思われる。人骨の周辺にあった石は遺体を取り囲んだ石囲である可能性が高い。従って、本施設を遺構とみなし「ST-01」という番号を付した。なお、この ST-01 人骨は幼児骨である。

「ST-01」の下層は人骨の堆積層である。この箇所には「集骨 3」という番号を付けた。人骨が厚く堆積しているが、関節している骨は皆無で、人骨は集積状態である。四肢骨については規則性はみられないが、頭蓋は岩陰の奥の方から検出される傾向にある。岩陰の奥では石灰岩に接しており、溶解した石灰質成分が頭蓋を取り囲んでおり、取り上げがかなり困難であった。

「集骨 3」の北側で検出された「集骨 1」と「集骨 2」は規模が小さく、層も薄く、この中の人骨も関節状態を保ったものは存在しなかった。

多種多様な貝製品が「集骨 1」、「集骨 2」、「集骨 3」とその周辺から多く検出されたが、着装状態で出土したものはなかった。ゴホウラ製腕輪が、遺骨収集時と遺骨収集坑（ピット X）の排土からそれぞれ 1 個ずつ出土したが、おそらくこの 2 個も着装状態ではなかったと思われる。（松下孝幸）

2. 人骨の年代

別項（第 III 章）で詳述されているように、本遺跡は遺物から「縄文時代後期を中心とする時期」に比定されている。念のために人骨から AMS 年代 (^{14}C) を測定してみた。集骨 3 の中層の人骨の年代は 3820 ± 40 年 BP、暦年代では B.C. 2340 ~ B.C. 2200 年 (1σ)、B.C. 2460 ~ B.C. 2140 年 (2σ)、下層の人骨の年代は 3720 ± 40 年 BP、暦年代では B.C. 2200 ~ B.C. 2040 年 (1σ)、B.C. 2270 ~ B.C. 1980 年 (2σ) という数値が出ており、遺物の年代観（縄文後期）とほぼ一致している。（松下孝幸）

第 III 章 まとめ

以上、2007 年と 2008 年の両年に亘る人工遺物の概要について記した。調査は 2009 年も実施する予定であり、摩文仁ハンタ原遺跡についての機能等については同調査の成果を踏まえて判断されるものであるが、ここで今一度概要を整理して中間のまとめとしたい。

過去 2 ヶ年に亘る調査で最も注目されるのは、沖縄本島南部における埋葬遺構の検出とそれに伴って多種多様な貝製品が出土したことである。

まず埋葬遺構であるが、摩文仁ハンタ原遺跡は海岸段丘上にある海食崖下の岩陰部分とその前庭部から構成される。石灰岩崖下や岩陰等で埋葬遺構が検出された例としては、具志川島遺跡群^(註1)と具志川グスク崖下地区^(註2)などがある。両遺跡では共通して豊富な貝製品が出土することが報告されているが、前者は縄文時代中期から同晩期までの時期に^(註1)、後者は沖縄貝塚時代後期に位置づけられている^(註2)。

土器片は30点出土したが、第9図38の大山式土器の口縁部片を除いては、全てが小破片の無文資料であるため、土器型式から本遺跡の時期を把握するまでは至っていない。

貝製品の出土数は186点と人工遺物の約80%を占めている。種別的には貝輪、線刻有孔貝製品、シャコガイ製有孔異形板状製品、白玉、小玉、タカラガイ製品、貝珠、札状製品、タカラガイ札状製品、巻貝製品、巻貝有孔製品、二枚貝有孔製品、有孔貝製品及びヤコウガイ製品の14種が確認できたが、ここでは特徴のある資料の類例について記述する。まず第8図22の線刻有孔貝製品としたものは、クロミナシガイの体層に幾何学文の線刻と穿孔を施したもので、形体的に類似資料のみられないものである。線刻文のモチーフについては、面縄前庭V式土器の文様に類似するとの指摘^(註3)を得ており、さらなる類例の増加が待たれる。本資料は孔に紐ずれ痕がみられることから、日常的に使用されていた可能性もある。第9図35・36、第10図52に図化したツノガイ体層部を利用した貝珠は、城間古墓群A地区第9号墓内出土遺物^(註4)、具志川グスク崖下地区^(註2)などでも報告がある。次に第9図45のシャコガイ製異形板状製品としたものであるが、シャコガイの蝶番近くの腹縁部を利用したもので、本資料も孔に紐ずれ痕がみられる。本資料と同様に穿孔と周縁部を有段状に整形するものとしては、喜念原始墓^(註5)、面縄第一貝塚^(註6)、宇和川原半洞穴遺跡^(註7)、城間古墓群A地区第9号墓^(註4)、クマヤー洞穴遺跡^(註8)などでも報告されているが、形を一にする資料はない。他の資料についての類似例報告は以下のとおりである。第10図57・58のイタチザメ歯有孔製品及び第10図65イノシシ有孔製品は古我地原貝塚^(註9)などから類例報告がある。第10図63に示した巻貝有孔製品は具志川島岩立遺跡西区^(註10)に類例がある。第11図72～74の札状製品は古我地原貝塚^(註9)や城間古墓群A地区第9号墓内出土遺物^(註4)など、第13図84は古我地原貝塚^(註9)などで類例が出土している。貝輪は37点が得られており、素材としてはメンガイ、オオツタノハ、オオベッコウガサガイ、サラサバテイ、ゴホウラなどが用いられている。第12図78の貝輪はクマヤー洞穴遺跡^(註8)などから類例の出土がある。

2ヶ年間の調査で出土した人工遺物は、骨貝製品17種中、集骨3で10種が得られ、集骨1の3種、集骨2の6種と比べると差がみられる。特に巻貝有孔製品以下は集骨1・2では出土しておらず、これが時間差によるものかあるいは遺骨収集活動に伴う攪乱によるためかは判然としない。類似例の出土報告から推察するとこれらの遺物は、縄文時代後期から同晩期までの時期に位置づけられている遺跡での出土が多く報告されており、現時点では摩文仁ハンタ原遺跡は縄文時代後期を中心とする時期と仮定しておきたい。

(湖城・大城)

註1 a. 『具志川島遺跡群 第二次発掘調査報告書』(伊是名村文化財調査報告書第2集) 沖縄県伊是名村教育委員会
1978年3月

- b. 『具志川島遺跡群－岩立地区埋葬遺構の調査－ 第三次発掘調査報告書 』(伊是名村文化財調査報告書第3集)
沖縄県伊是名村教育委員会 1979年3月
- c. 『具志川島遺跡群 第四次発掘調査報告書 』(伊是名村文化財調査報告書第6集) 沖縄県伊是名村教育委員会
1981年3月
- d. 『具志川島遺跡群』(伊是名村文化財調査報告書第9集) 沖縄県伊是名村教育委員会 1993年3月
- 註2 研究代表者 土肥直美 『沖縄県具志川市具志川グスク崖下地区の発掘調査－沖縄先史時代からグスク時代への移行期解明を目指して－』(課題番号 17570195) 平成17年度～平成19年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))
研究成果報告書 平成20(2008)年3月
- 註3 北谷町教育委員会の島袋春美氏からご教示を頂いた。
- 註4 『城間古墓群－牧港補給地区開発工事に伴う緊急発掘調査報告書－』(浦添市文化財調査報告書) 沖縄県浦添市
教育委員会 1990年3月
- 註5 三宅宗悦「南島の先史時代」『人類学・先史学講座』第16巻 雄山閣 1940年
- 註6 『面縄貝塚群 第1貝塚・第2貝塚・第3貝塚・第4貝塚』(伊仙町埋蔵文化財発掘調査報告書(3)) 鹿児島県大島郡
伊仙町教育委員会 1985年3月
- 註7 『玉城村の遺跡－第1次分布調査概報－』 玉城村教育委員会 1979年3月
- 註8 中村愿「第7章 考古資料」『北谷町史 第3巻資料編2 民俗下』北谷町役場 1994年2月
- 註9 『石川市古我地原貝塚－沖縄自動車道(石川～那覇間) 建設工事に伴う緊急発掘調査報告書(6)－』(沖縄県文化財調
査報告書第84集) 沖縄県教育委員会 1987年12月
- 註10 『企画展 原始人の知恵と工夫－天然素材(貝殻・骨・角・牙)の活用－』 沖縄県立埋蔵文化財センター 2008年9月

人骨は「集骨3」のうち第1次調査で発掘した人骨を報告したにすぎないが、それでも最小個体数は27体あり、第3次調査終了時にはおそらく50体を超えるものと思われる。これほど多くの縄文人骨が出土した遺跡は沖縄本島南部には存在しないが、本島全体をみわたしてみてもその出土量は沖縄県屈指の量であり、保存状態も良好である。頭蓋は男性の特徴を知ることができた。頭型は短頭型を示すが、その程度は強いものではなく、また顔面は低・広顔を示すが、著しい低・広顔でもない。四肢骨は、大腿骨がかなり細いが、その割には上腕骨がやや太い。大腿骨はやや長く、柱状性がみられる。上腕骨と大腿骨上部は扁平であるが、脛骨には扁平性は認められない。また、男性の推定身長は西北九州人なみで、著しい低身長ではないが、女性はかなり身長が低い。なお、今回検索した資料の中には風習的抜歯は認められなかった。

(松下孝幸)



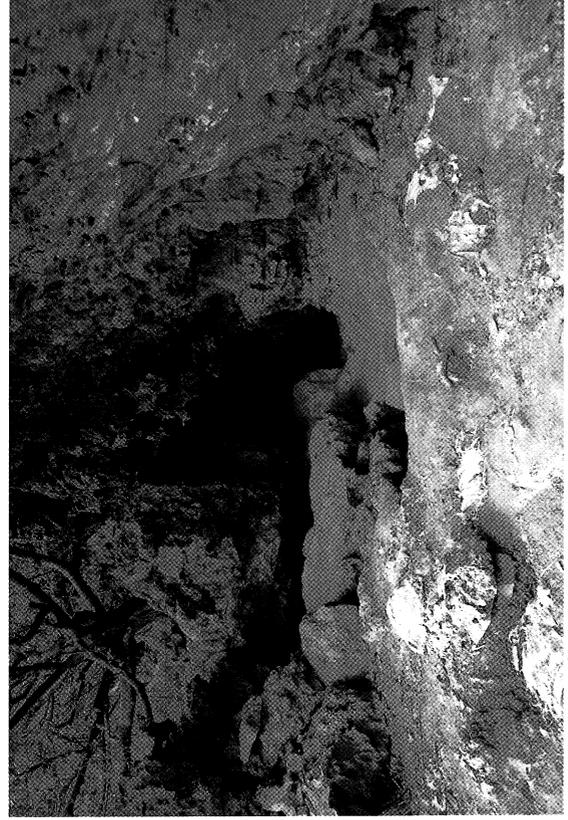
第1図版3 発掘作業風景



第1図版1 遺跡透景（写真中央が調査地）



第1図版4 ふるいがけ作業風景



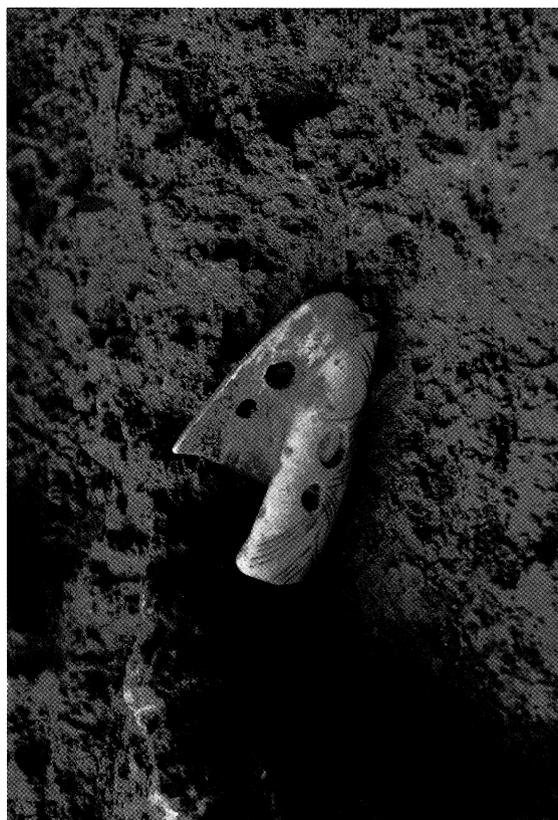
第1図版2 遺跡近景



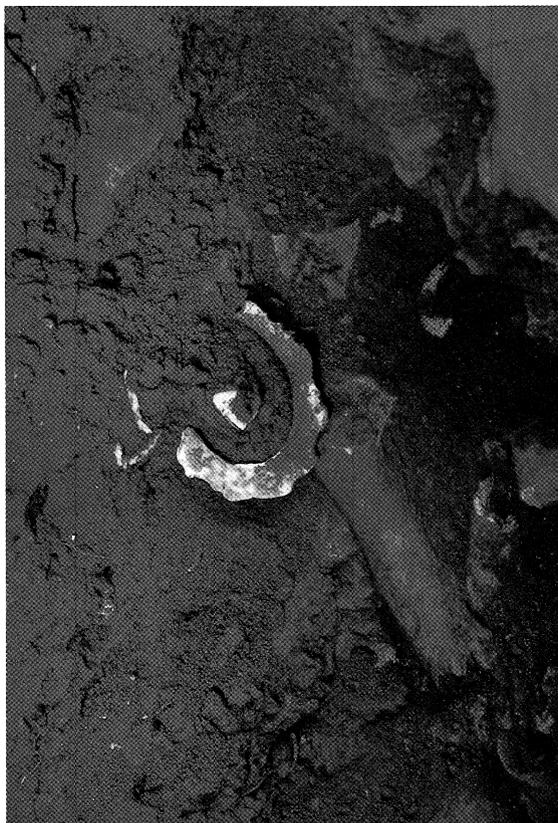
第2図版3 シヤコガイ製有孔異形板状製品（集骨3）出土状況



第2図版1 サメ歯有孔製品（集骨3）出土状況



第2図版4 線刻有孔製品（集骨2）出土状況



第2図版2 貝輪（集骨3）出土状況

摩文仁ハンタ原遺跡発掘調査報告(1)正誤表

頁	行	誤	正
5	34	地形実測図	調査地平面図
		第7図は欠番です	
5	3	第7図	第8図
5	4	第8図	第9図
5	5	第9図	第10図
5	6	第10図	第11図
5	7	第11図	第12図
5	8	第12図	第13図
18		第7図	第8図
20		第8図	第9図
22		第9図	第10図
25		第10図	第11図
27		第11図	第12図
28		第12図	第13図
11	6	岩影	岩陰
31	8	線刻有孔貝製品	線刻有孔製品
31	11	線刻有孔貝製品	線刻有孔製品
31	16	シャコガイ製異形板状製品	シャコガイ製有孔異形板状製品
34	第2図版4	(集骨2)土状況	(集骨2)出土状況



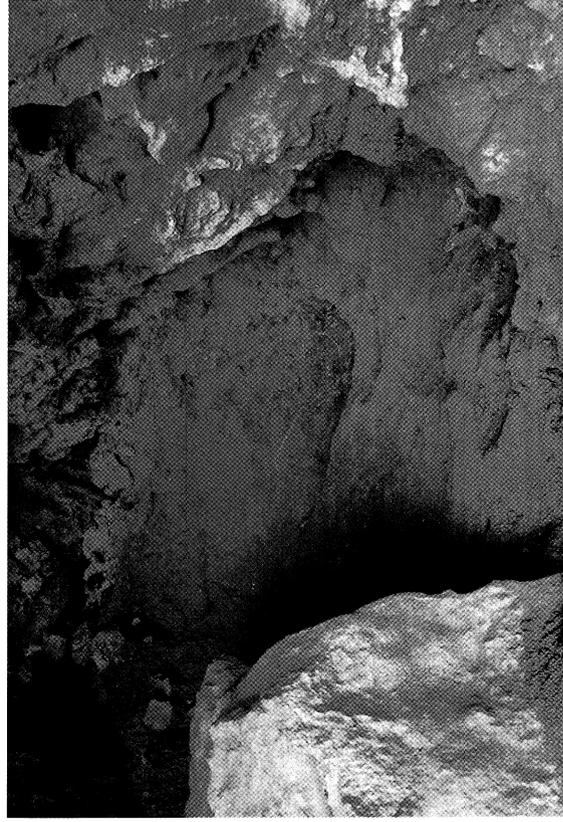
第3図版3 貝輪（集骨3）出土状況



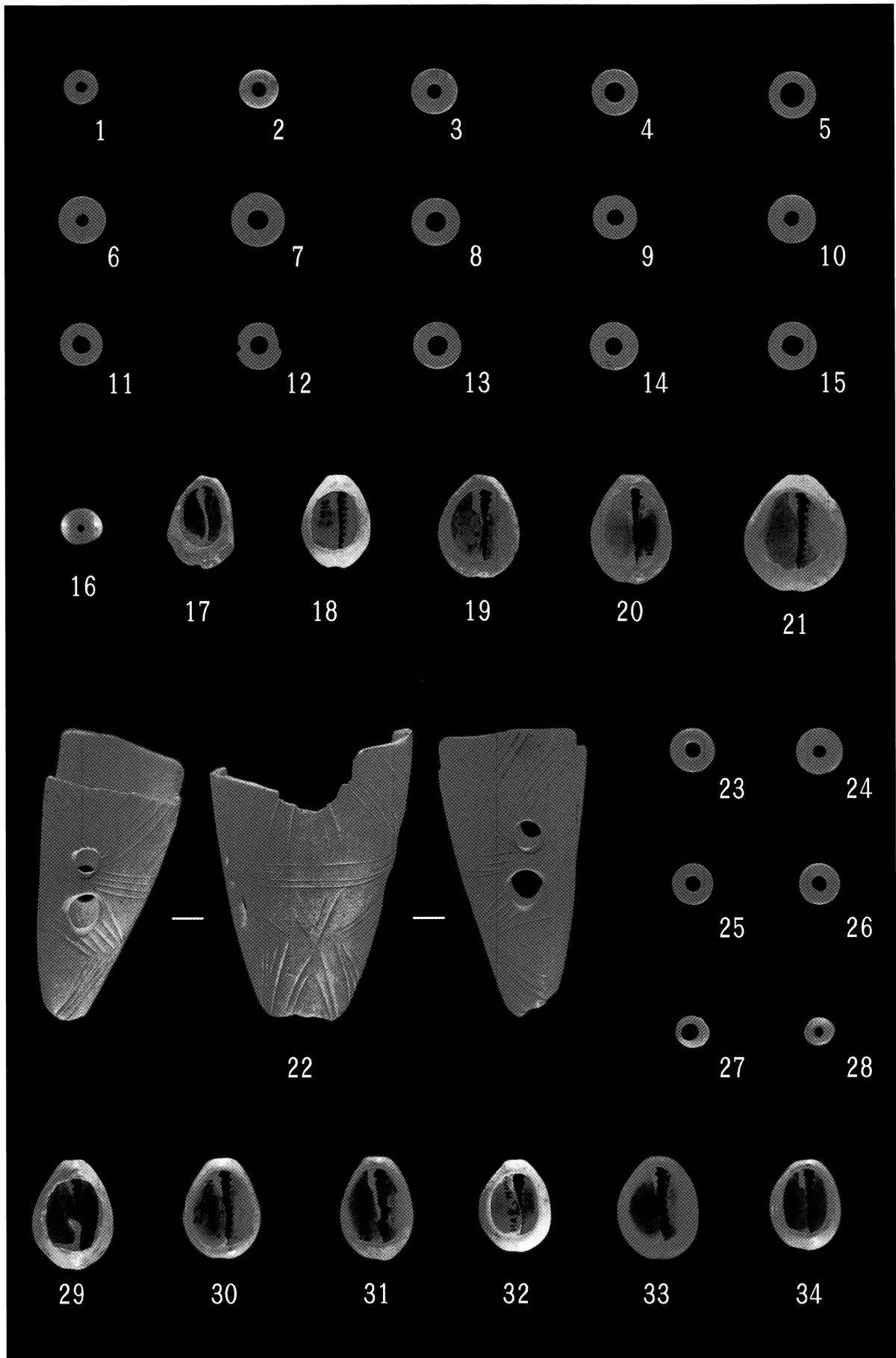
第3図版1 貝輪（集骨2下層）出土状況



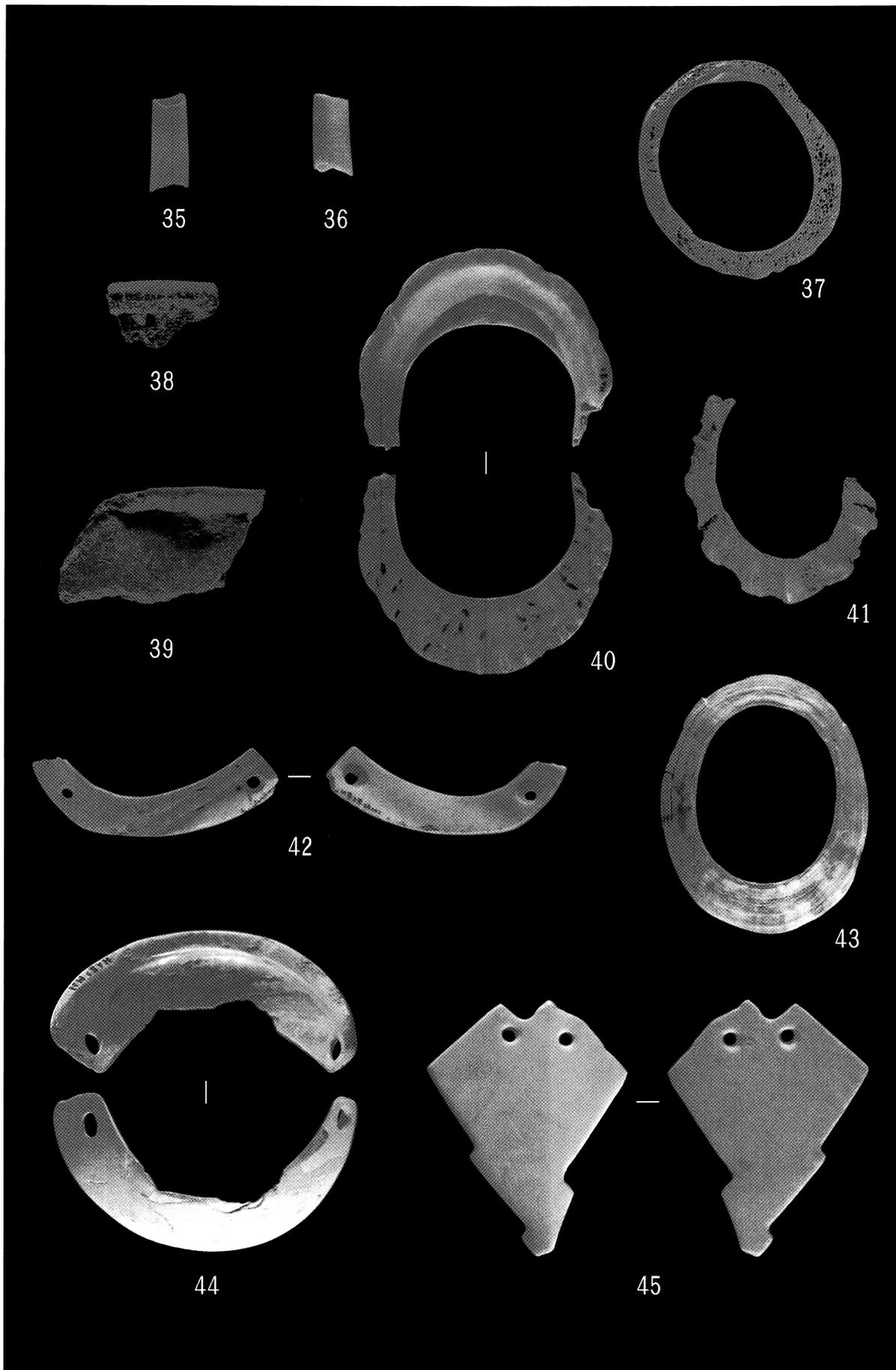
第3図版4 埋め戻し完了風景



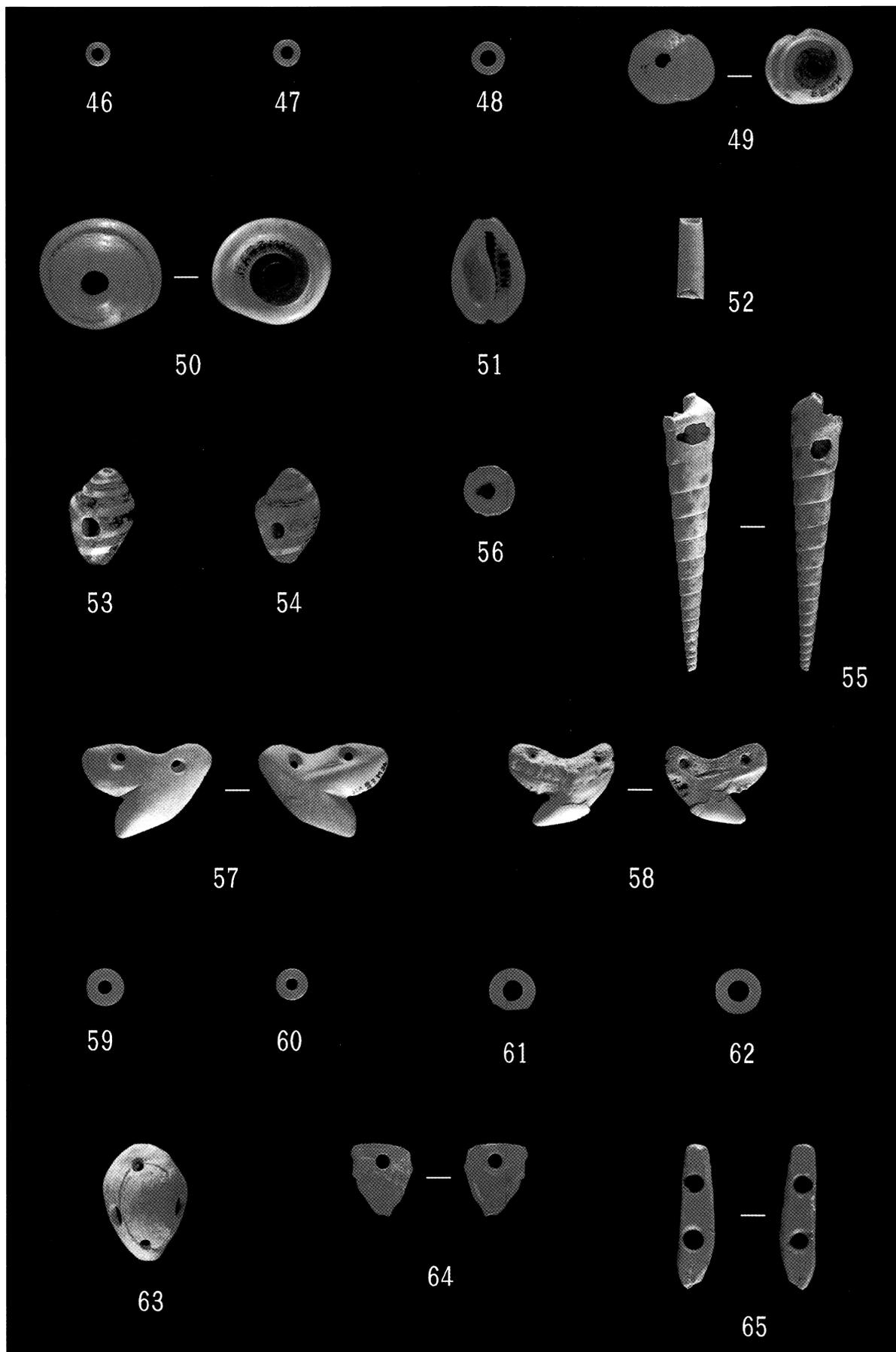
第3図版2 発掘作業完了の状況



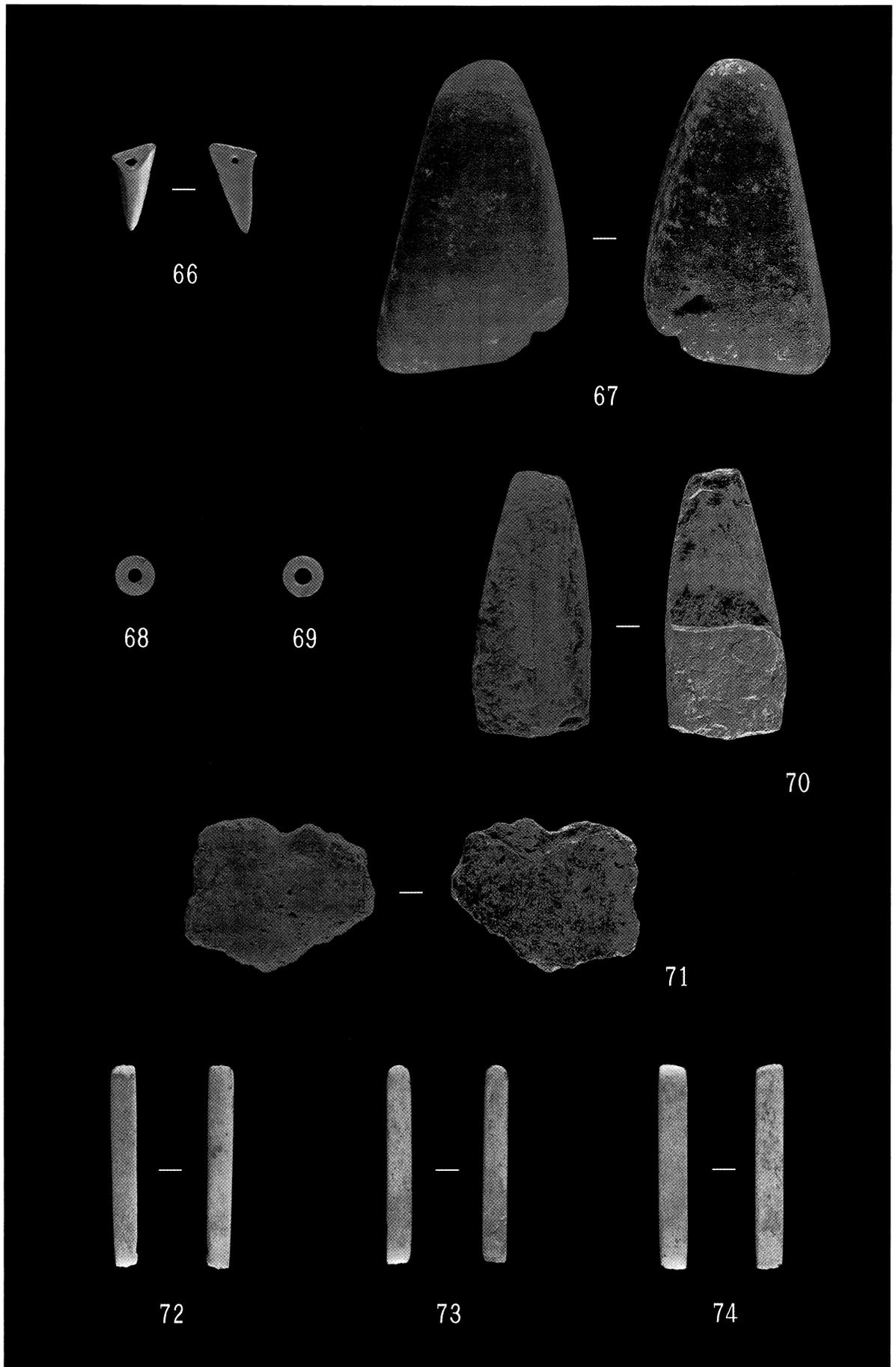
第4図版 出土遺物1 (集骨1 集骨2)



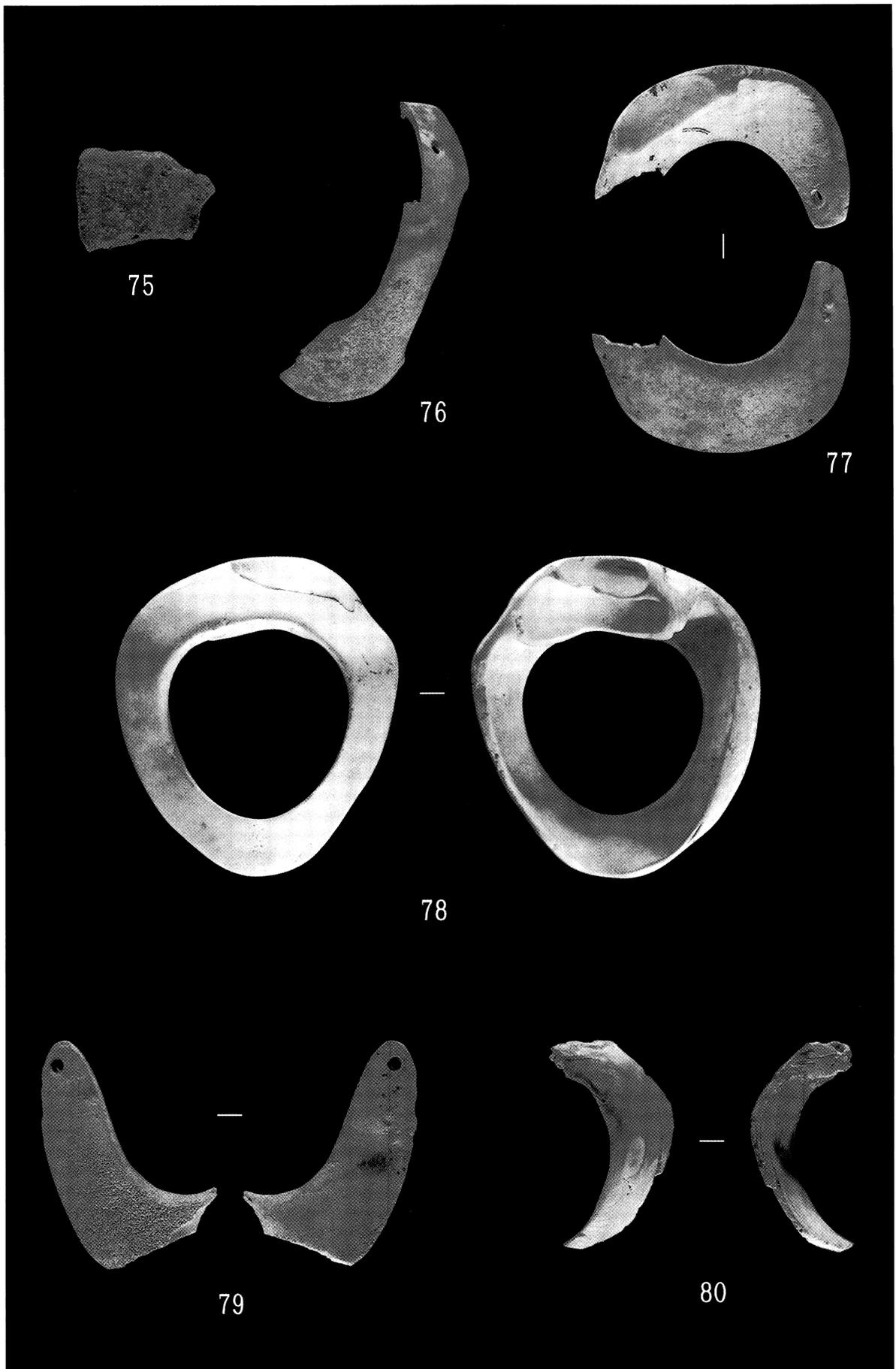
第5図版 出土遺物2 (集骨2 集骨2下層 集骨3)



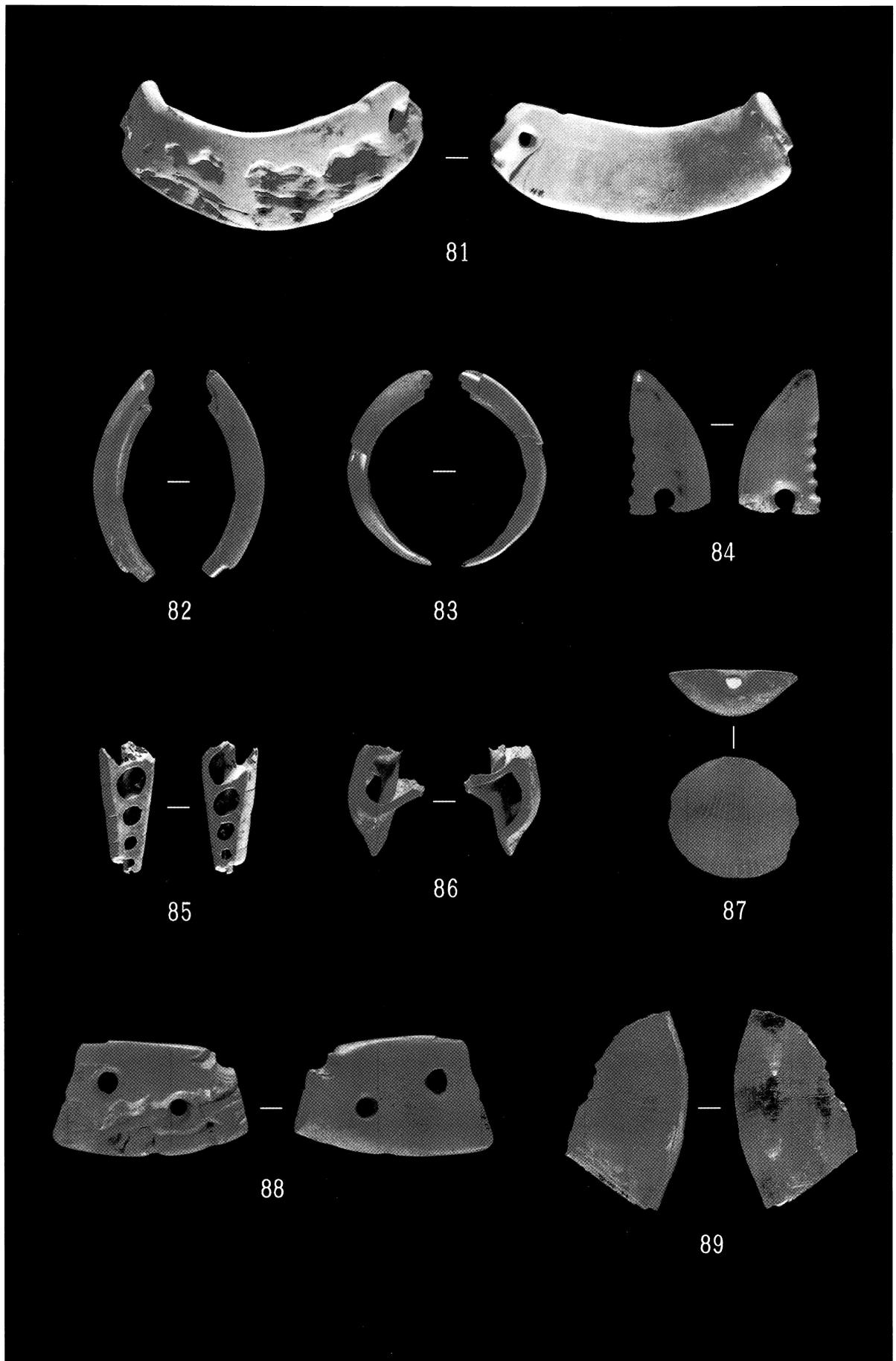
第6図版 出土遺物3 (集骨3 集骨4 Aグリッド)



第7図版 出土遺物4 (ピットX ST01北 ST01伴出 Bグリッド)



第8図版 表採遺物1



第9図版 表採遺物2

松下真実*

【キーワード】：沖縄県、洞穴、縄文人骨、短頭型、高身長、低身長、集骨

はじめに

沖縄県糸満市^{まぶに}字摩文仁^{ぼる}ハンタ原に所在する摩文仁ハンタ原遺跡の発掘調査を、2007年と08年におこない、多量の貝製品や土器を伴った人骨を発掘した。頭蓋や四肢骨の一部には石灰岩に厚く被覆された状態で検出されたものもある。本遺跡は沖縄戦の激戦地であった摩文仁に存在し、近くには「南冥の塔」が存在する。発掘調査の詳細は本編で詳述しているとおりで、本岩陰では遺構や遺物が奇跡的に保存されており、人骨の堆積層は厚く、その保存状態もきわめて良好である。人骨は琉球列島では出土例数が少ない縄文人骨であり、資料としてはきわめて貴重である。

日本列島から出土している旧石器時代人骨のうち、ほぼ全身骨格が揃っているものは沖縄県の港川遺跡から出土した人骨しかない。この旧石器人がその後どのような形質変化をたどったかについては、沖縄で縄文時代の古い時期の人骨が出土しないために明らかではない。縄文晩期に属する人骨は宜野湾市^{ましきあざまぼる}真志喜安座間原遺跡、北谷町のクマヤー洞穴、伊是名村具志川島遺跡群、ガルマンドウ原洞穴などから出土しており、次第に例数も増えてきたが、縄文後期以前に属する人骨の出土は宜野湾市テラガマなどごく一部から、しかも断片的な人骨しか検出されていない。

本遺跡はまだ発掘調査を継続しているが、2年間の調査でもある程度の数の人骨を発掘することができた。人骨は集骨状態で、破碎しているものが多かったが、中には顔を復元することができたものもあった。取り急ぎ2007年に調査した人骨について人類学的観察や計測をおこない、若干の考察もおこなったので、その結果を概報的に報告しておきたい。

資 料

本遺跡の発掘調査はまだ継続しているので、本稿は2007年の発掘調査で出土した人骨のうち、最も人骨の堆積が厚く、密度の高い「集骨3」と唯一の埋葬人骨であるST-01人骨について、概報的に報告するものである。各骨には記号と番号を付した。出土した人骨は第1表に示すとおりである。年齢区分に関しては第3表を参照されたい。なお、この人骨群は人骨とともに出土した土器などの遺物の考古学的所見とAMS年代測定から、縄文時代後期に属する人骨と推測されている。

計測方法は、Martin-Saller(1957)によったが、脛骨の横径はオリビエの方法で計測し、鼻根部については鈴木(1963)と松下ら(1983)の方法で計測した。

まず、各人骨ごとに体数を推測した。

1. ST-01号人骨(幼児)

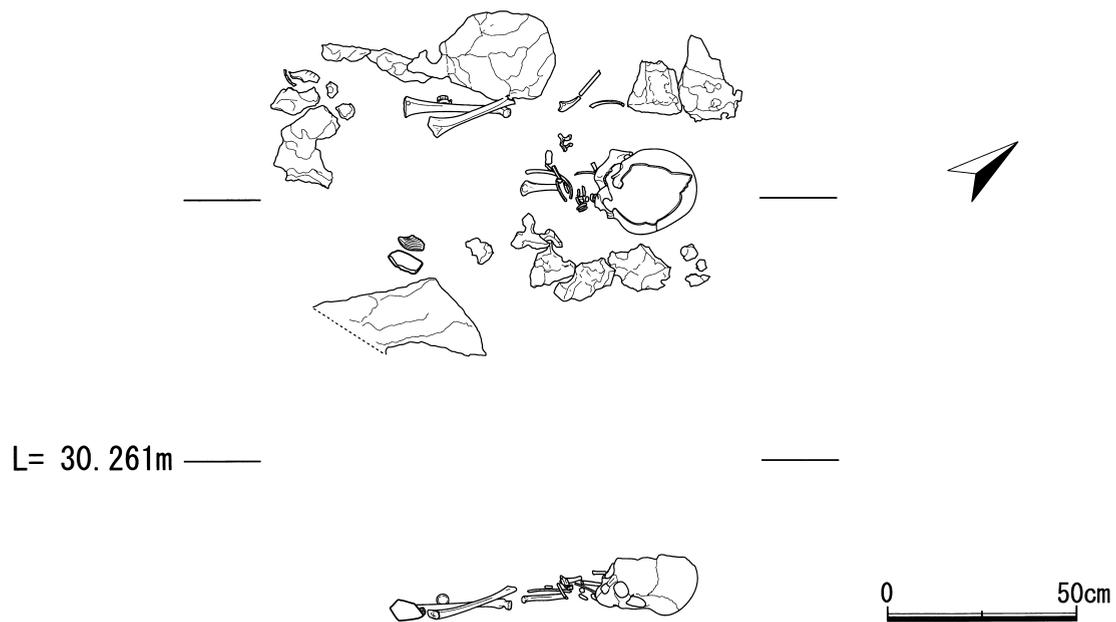
周囲を石灰岩の礫で囲まれた埋葬状態の幼児骨が出土した。比較的保存状態はよく、頭蓋、下顎骨、肩甲骨、鎖骨、上腕骨、左橈骨、右尺骨、右大腿骨、右脛骨が残存していた。年齢は歯の萌出程度か

* Masami MATSUSHITA

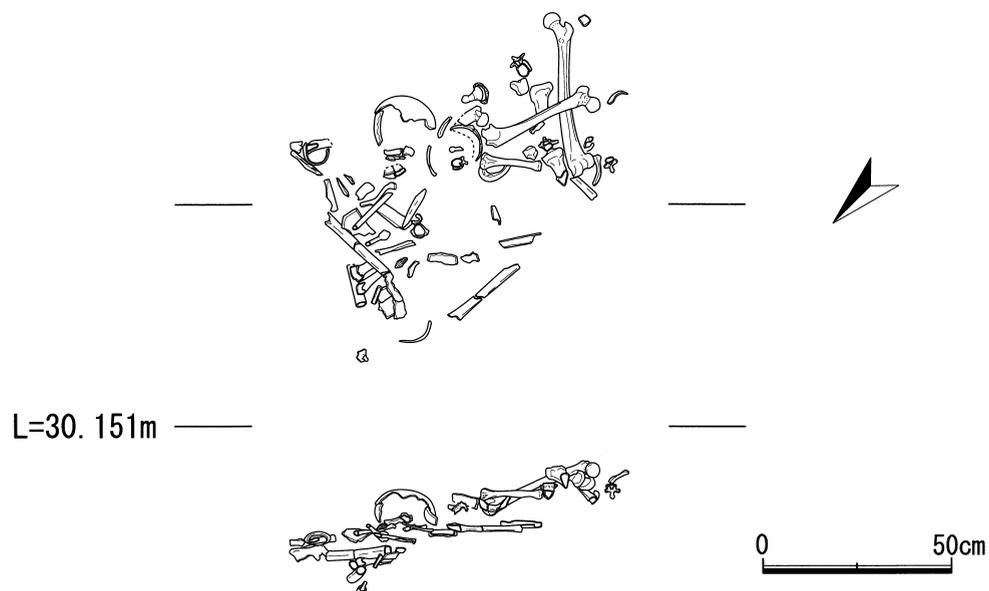
第1表 人骨一覧表 (Table 1. List of skeletons)

人骨番号	性別	年齢	備考	人骨番号	性別	年齢	備考
ST-01	—	幼児 (4歳前後)		FE-5	女性	不明	右
SK-1	男性	熟年		FE-6	女性	不明	右 FE-13 と同一個体
SK-2	男性	熟年		FE-7	女性	不明	右
SK-3	男性	熟年		FE-8	女性	不明	右
SK-4	男性	熟年		FE-9	女性	不明	右
SK-5	男性	壮年		FE-10	—	幼児 (3歳前後)	右
SK-6	男性	壮年		FE-11	女性	不明	右 FE-19 と同一個体
SK-7	女性	壮年		FE-12	女性	不明	左
SK-8	女性	壮年		FE-13	女性	不明	左
SK-9	男性	不明		FE-14	女性	不明	左 FE-22 と同一個体
MA-1	男性	不明		FE-15	—	小児 (10歳前後)	左
MA-2	男性	不明		FE-16	女性	不明	左
MA-3	男性	不明		FE-17	女性	不明	左
MA-4	女性	不明		FE-18	女性	不明	左
MA-5	男性	不明		FE-19	女性	不明	左
MA-6	男性	不明		FE-20	男性	不明	左
MA-7	男性	不明		FE-21	男性	不明	左
MA-8	女性	不明		FE-22	女性	不明	右
MA-9	男性	不明		FE-23	男性	不明	右
MA-10	男性	不明		FE-24	男性	不明	右
MA-11	男性	不明		FE-25	男性	不明	右
MA-12	男性	不明		TB-1	男性	不明	右
MA-13	女性	不明		TB-2	男性	不明	右
MA-14	—	幼児 (5歳前後)		TB-3	男性	不明	右
MA-15	—	小児 (6歳前後)		TB-4	男性	不明	右
HU-1	男性	不明	右	TB-5	男性	不明	右
HU-2	男性	不明	右	TB-6	男性	不明	右 TB-21 と同一個体
HU-3	女性	不明	右	TB-7	女性	不明	右 TB-22 と同一個体
HU-4	男性	不明	右	TB-8	女性	不明	右 TB-20 と同一個体
HU-5	女性	不明	右	TB-9	女性	不明	右
HU-6	女性	不明	右	TB-10	女性	不明	右
HU-7	男性	不明	右 HU-8 と同一個体	TB-11	男性	不明	右
HU-8	男性	不明	左 HU-7 と同一個体	TB-12	女性	不明	右
HU-9	男性	不明	左	TB-13	—	幼児 (3歳前後)	右
HU-10	男性	不明	左	TB-14	女性	不明	右 TB-23 と同一個体
HU-11	男性	不明	左	TB-15	女性	不明	右 TB-24 と同一個体
HU-12	男性	不明	左	TB-16	男性	不明	左
HU-13	女性	不明	左	TB-17	男性	不明	左
HU-14	女性	不明	左	TB-18	男性	不明	左
HU-15	女性	不明	左	TB-19	男性	不明	左
HU-16	—	小児 (10歳前後)	左	TB-20	女性	不明	左
HU-17	女性	不明	右	TB-21	男性	不明	左
HU-18	—	小児 (10歳前後)	右	TB-22	女性	不明	左
HU-19	—	小児 (10歳前後)	右	TB-23	女性	不明	左
HU-20	女性	不明	右	TB-24	女性	不明	左
HU-21	—	不明	左	TB-25	男性	不明	左
HU-22	男性	不明	左	TB-26	男性	不明	左
HU-23	—	不明	左	TB-27	女性	不明	左
HU-24	女性	不明	左	TB-28	女性	不明	左
FE-1	男性	不明	右 FE-20 と同一個体	TB-29	男性	不明	左
FE-2	女性	不明	右 FE-18 と同一個体	TB-30	男性	不明	左
FE-3	男性	不明	右	TB-31	—	不明	左
FE-4	男性	不明	右				

SK：頭蓋、MA：下顎骨、HU：上腕骨、FE：大腿骨、TB：脛骨



第1図 AグリットST-01 実測図



第2図 Aグリット集骨3 実測図

ら4歳前後と推定した。

2. 頭蓋

復元がある程度できたものが9体（男性：7、女性：2）で、そのうち脳頭蓋と顔面頭蓋が残存していたのは3体分である（男性：3）。その他の大部分は脳頭蓋の一部が残存していた。

3. 下顎骨

下顎骨は15体分検出された（男性：10、女性：3、未成年：2）。

4. 上腕骨

上腕骨は、右側が11本（男性：4、女性：5、小児：2）、左側が13本（男性：6、女性：4、小児：1、不明：2）の合計24本存在する。左右対をなすものが少なくとも2組（男性：1、小児：1）ある。よっ

て上腕骨の体数は少なくとも 22 体分存在することになる。

5. 大腿骨

大腿骨は、右側が 15 本（男性：6、女性：8、幼児：1）、左側が 10 本（男性：2、女性：7、小児：1）の合計 25 本存在する。そのうち対をなすものが 5 組（男性：1、女性：4）あるので、男性が 7 体、女性が 11 体、幼児が 1 体、小児が 1 体の合計 20 体存在することになる。

6. 脛骨

脛骨は、右側が 15 本（男性：7、女性：7、幼児：1）、左側が 16 本（男性：9、女性：6、不明：1）の合計 31 本存在する。左右対をなすものが 5 組（男性：1、女性：4）存在するので、体数は男性が 15 体、女性が 9 体、幼児が 1 体、不明が 1 体の合計 26 体分である。

7. 出土した体数について

第 2 表に各骨から推測した最小個体数を表示した。頭蓋は 9 体分、下顎は 15 体分、上腕骨は 22 体分、大腿骨は 20 体分、脛骨は 26 体分であった。もっとも数が多いのは脛骨の 26 体分である。この数には ST-01(4 歳前後) 人骨が含まれていないので、この 1 体を含めると合計 27 体分出土したことになる。

第 2 表 最小個体数 (Table 2. Minimum number)

	成人			幼少児		合計
	男性	女性	不明	幼児	小児	
頭蓋	7	2	0	0	0	9
下顎骨	10	3	0	1	1	15
上腕骨	9	9	2	0	2	22
大腿骨	7	11	0	1	1	20
脛骨	15	9	1	1	0	26

第 3 表 年齢区分 (Table 3. Division of age)

年齢区分		年 齢
未成人	乳児	1 歳未満
	幼児	1 歳～5 歳（第一大臼歯萌出直前まで）
	小児	6 歳～15 歳（第一大臼歯萌出から第二大臼歯歯根完成まで）
	成年	16 歳～20 歳（蝶後頭軟骨結合癒合まで）
成人	壮年	21 歳～39 歳（40 歳未満）
	熟年	40 歳～59 歳（60 歳未満）
	老年	60 歳以上

注) 成年という用語については土井ヶ浜遺跡第 14 次調査報告書 (1996) を参照されたい。

所 見

1. 頭蓋

出土した頭蓋は側頭骨や頭頂骨の一部が残存しているものが多数で、計測できるものが少なかった。今回比較的保存状態のよかった 3 体の頭蓋について、その特徴を記載しておきたい。

SK-1 (男性・熟年)

①脳頭蓋

脳頭蓋の保存状態は比較的良好である。骨壁は厚く、外後頭隆起の発達は良好である。乳様突起は発達している。左外耳道が観察できたが、骨種は認められない。縫合は三主縫合ともに内板が癒合し

ている。外板では三主縫合ともに一部癒合が認められるものの大部分は開離している。

計測値は、頭蓋最大長が 182mm、頭蓋最大幅は 143mm で、頭蓋長幅示数は 78.57 となり、頭型は中頭型に属している。また、頭蓋水平周は 522mm、横弧長は 325mm、正中矢状弧長は 376mm である。

②顔面頭蓋

眉上弓および眉間の隆起は弱く、前頭結節はやや発達している。鼻骨の隆起は強く、鼻根部はやや陥凹している。

計測値は、上顔高が (64) mm、頬骨弓幅が [138] mm、中顔幅が [100] mm で、上顔示数は [46.38] (K)、[64.00] (V) で、顔面には低・広顔傾向が認められる。眼窩幅は、46mm(右)、眼窩高は (30) mm(右)、(32) mm(左) で、眼窩示数は (65.22)(右) となり、低眼窩に属している。鼻幅は 28mm、鼻高は 49mm で、鼻示数は 57.14 となり、低鼻に属している。鼻根部は前眼窩間幅が 18mm、鼻根横弧長は 23mm、鼻根彎曲示数は 78.26 となり、鼻骨は鼻根から隆起している。

③歯

上顎の残存歯と歯槽の状態を歯式で表すと次のとおりである。

／／／／／ ● ● ● | ● ● ● ／／／／／ [○：歯槽開存 ●：歯槽閉鎖 ／：不明]

(1：中切歯、2：側切歯、3：犬歯、4：第一小臼歯、5：第二小臼歯、6：第一大臼歯、7：第二大臼歯、8：第三大臼歯)

上顎の歯槽は残存している部分のすべてで閉鎖しており、抜歯の有無は確認できなかった。

④性別・年齢

性別は、眉上弓の隆起は弱いものの、乳様突起は大きく、外後頭隆起の発達は良好であることから男性と推定した。年齢は、三主縫合の内板が癒合しており、外板では三主縫合ともに開離しているので熟年と推定した。

SK-2 (男性・熟年)

①脳頭蓋

脳頭蓋の保存状態は良好である。外後頭隆起の発達は良好で、乳様突起は発達している。左外耳道が観察できたが、骨種は認められない。縫合は、三主縫合の内板は冠状縫合では癒合しているが、矢状縫合、ラムダ縫合ともに開離している。外板は三主縫合ともに開離している。

計測値は、頭蓋最大長が 176mm、頭蓋最大幅は 142mm で、頭蓋長幅示数は 80.68 となり、頭型は短頭型に属している。また、頭蓋水平周は 507mm、横弧長は 330mm である。

②顔面頭蓋

眉上弓および眉間の発達は良好で、前頭結節の発達は弱い。鼻骨の隆起は強く、鼻根部も強く陥凹している。顔面頭蓋の保存状態は悪く、ほとんど計測できなかった。

計測値は、上顔高が 63mm である。鼻根部は、前眼窩間幅が 20mm、鼻根横弧長は 28mm で、鼻根彎曲示数は 71.43 となり、鼻骨は強く隆起している。

③歯

上顎の残存歯と歯槽の状態を歯式で表すと次のとおりである。

／ ⑦ 6 5 4 ③ ② ① | ① ② ③ 4 ⑤ ／／／

上顎の抜歯は認められなかった。また歯の咬耗度は歯根しか残存していないので不明である。

④性別・年齢

性別は、眉上弓および眉間の発達は良好で、乳様突起は大きく、外後頭隆起の発達が良好であることから男性と推測した。年齢は、内板では三主縫合ともに癒合しており、外板では三主縫合ともに開離しているので熟年と推測した。

SK-3 (男性・熟年)

①脳頭蓋

脳頭蓋の保存状態は悪い。骨壁は厚く、外後頭隆起の発達は良好である。乳様突起は発達している。右外耳道が観察できたが、骨種は認められない。縫合は三主縫合ともに内板が癒合している。外板では冠状縫合の癒合は進んでいるが、矢状縫合とラムダ縫合が開離している。

計測値は、頭蓋最大長が 179mm、頭蓋最大幅は [146] mm で、頭蓋長幅示数は [81.56] となり、頭型は短頭型に属している。横弧長は [332] mm である。

②顔面頭蓋

眉上弓および眉間は強く隆起し、前頭結節の発達は弱い。側頭線は明瞭で強く隆起している。上顎骨前頭突起は矢状方向を向いている。

計測値は、上顔高が 64mm、中顔幅が [112] mm で、上顔示数は [57.14] (V) となり、顔面には過広顔傾向が認められる。

③歯

上顎の残存歯と歯槽の状態を歯式で表すと次のとおりである。

／ ／ 6 5 4 ③ ② 1 | 1 ② 3 4 ／ ／ ／ ／

上顎の抜歯は認められなかった。また、歯の咬耗度は歯根しか残存していないので不明である。

④性別・年齢

性別は、眉上弓および眉間は強く隆起し、側頭線は明瞭で強く隆起しており、乳様突起も大きく、外後頭隆起の発達は良好であることから男性と推定した。年齢は、内板では三主縫合ともに癒合し、内板はすべての縫合で開離しているので熟年と推測した。

3. 四肢骨

(1) 上肢骨

①上腕骨

まず、保存状態がもっとも良好で、ほぼ完全に残存していた HU-9 (男性) と HU-3 (女性) について、所見を記載しておきたい。

HU-9 (男性)

長さは縄文人としては長く、骨体も太い。三角筋粗面の発達はきわめて良好であり、稜線も明瞭で、骨頭も大きい。また骨体は扁平である。

計測値は、最大長が 301mm (左)、骨体最小周は 65mm (左)、中央周は 69mm (左)、長厚示数は 21.59 (左) で、骨体はあまり丈夫ではない。また、中央最大径は 24mm (左)、中央最小径は 16mm (左) で、骨体断面示数は 66.67 (左) となり骨体には強い扁平性が認められる。上腕骨最大長から、Pearson および藤井の公式を用いて推定身長値を算出すると、それぞれ 157.75cm (Pearson)、158.09cm (藤井) とな

り身長は低くない。

HU-3 (女性)

長さは短く、骨体は細い。骨体は外側にやや彎曲している。骨頭は小さいが、三角筋粗面の発達は良好であり、粗線の発達も良好である。

計測値は、最大長が 254mm (左)、骨体最小周は 57mm (左)、中央径は 63mm (左)、長厚示数は 22.44 (左) で、骨体は頑丈である。また、中央最大径は 23mm (左)、中央最小径は 15mm (左) で、骨体断面示数は 65.22 (左) となり、骨体には強い扁平性が認められる。上腕骨最大長から、Pearson および藤井の公式を用いて推定身長値を算出すると、それぞれ 141.43cm (Pearson)、141.75cm (藤井) となり、身長はかなり低い。

その他、計測ができなかったものを含めて、観察所見を記載しておきたい。骨体がかなり大きいものが 4 例 (HU-1、2、9、22)、骨体が扁平なものが 4 例 (HU-4、5、12、14) 存在する。HU-22 は計測ができなかったが、三角筋粗面の発達が良好で、骨体はかなり大きい。

次いで、個体ごとの計測値を検討しておきたい。計測ができたのは男性 9 本 (右 : 4、左 : 5)、女性 6 本 (右 : 3、左 : 3) の計測ができた。最大長は男女ともに 1 例ずつ計測できたにすぎないが、その最大値は 301mm (男性) と 254mm (女性) で縄文人としては男性は大きく、女性では小さい。

男性では、中央周の最小値は 64mm (右)、63mm (左)、最大値は 75mm (右)、69mm (左) で、平均値は 68.75mm (右) (4 例)、65.40mm (左) (5 例) となり、平均値は、縄文人男性としてはやや細く、70mm を超える上腕骨は HU-1 の 75mm (右) しかないが、前述しているように、なかにはかなり径が大きく、伊礼原 E 遺跡出土の Y-1 人骨の上腕骨と相違ない大きさのものが存在する (HU-22) ことも注意しておきたい。

中央最大径は 24.50mm (右) (4 例)、23.00mm (左) (5 例)、中央最小径は 17.00mm (右) (4 例)、16.00mm (左) (5 例) で、骨体断面示数は最小値 65.22 (左右)、最大値 75.00 (右)、73.91 (左) で、平均値は 69.31 (右) (4 例)、69.62 (左) (5 例) となり、骨体は扁平である。

女性では、中央周の最小値は 55mm (右)、49mm (左)、最大値は 63mm (右)、56mm (左) で、平均値は 59.00mm (右) (2 例)、52.50mm (左) (2 例) となり骨体は細い。HU-13 は 49mm (左) と中央周が小さく、三角筋粗面の発達も弱いので未成人の可能性がある。中央最大径は 21.00mm (右) (2 例)、17.50mm (左) (2 例)、中央最小径は 14.50mm (右) (2 例)、13.50mm (左) (2 例) で、骨体断面示数は 69.45 (右) (2 例)、77.47 (左) (2 例) となり、骨体は扁平である。

(2) 下肢骨

① 大腿骨

大腿骨では保存状態の良い FE-1 (男性) と FE-2 (女性) について所見を記載しておきたい。

FE-1 (男性)

大腿骨の長さは短く、骨体は細い。粗線の発達は良好で、また骨体両側面の後方への発達も良い。骨体はゆるやかに捻転している。

計測値は、最大長が 409mm (右)、骨体中央周は 77mm (右) で、骨体は細い。骨体中央矢状径は 26mm (右)、中央横径は 23mm (右) で、骨体中央断面示数は 113.04 (右) となり、粗線や骨体両側面の後方への

発達は良好である。また、上骨体断面示数は 75.00 (右) となり、骨体上部の扁平性は強い。

FE-2 (女性)

大腿骨の長さは短く、骨体は細い。粗線の発達は良好で、また骨体両側面の後方への発達も良い。骨体はゆるやかに捻転している。

計測値は、最大長が 354mm (右)、骨体中央周は 70mm (右) で、骨体は細い。骨体中央矢状径は 23mm (右)、中央横径は 21mm (右) で骨体中央断面示数は 109.52 (右) となり骨体両側面の後方への発達は良好である。

その他、計測ができなかったものを含めて、観察所見を記載しておきたい。計測ができたのは男性 5 本 (右 : 3、左 : 2)、女性が 14 本 (右 : 7、左 : 7) である。

男性は、骨体中央周が 79.67mm (右) (3 例)、75.00mm (左) (1 例) で、骨体は全体的に細めである。骨体中央矢状径は 26.33mm (右) (3 例)、25.00 mm (左) (1 例)、骨体中央横径は 23.67mm (右) (3 例)、22.00 mm (左) (1 例) で、骨体中央断面示数は 111.36 (右) (3 例)、113.64 (左) (1 例) で、骨体両側面の後方への発達や粗線の発達は良好である。上骨体断面示数は 76.67 (右) (3 例)、75.43 (左) (2 例) で骨体上部は扁平である。

女性では、骨体中央周が 68.57mm (右) (7 例)、71.33mm (右) (3 例) で男性同様骨体は細い。骨体中央矢状径は 22.43mm (右) (7 例)、23.00mm (左) (3 例) で、中央横径は 21.29mm (右) (7 例)、22.00mm (左) (5 例) で、骨体中央断面示数は 105.28 (右) (7 例)、104.76 (左) (3 例) で、粗線および骨体両側面の後方への発達は良好である。また上骨体断面示数は 72.14 (左) (6 例)、77.83 (左) (4 例) で、骨体上部は扁平である。

②脛骨

男性脛骨は 15 本 (右 : 7、左 : 8) 計測ができた。骨体周は、最小値が 68mm (右)、70mm (左)、最大値が 79mm (右)、80mm (左) で、平均値は 74.86mm (右) (7 例)、74.60mm (左) (5 例) となり骨体は細い。中央断面示数は最小値が 63.33 (右)、62.96 (左)、最大値が 74.07 (右)、85.19 (左) で、平均値が 68.52 (右) (7 例)、74.05 (左) (7 例) となる。右側では弱い扁平性が認められるが、左側では扁平性は認められない。

女性は 13 本 (右 : 7、左 : 6 本) が計測できた。骨体周は、最小値が 63mm (右)、61mm (左)、最大値が 71mm (左右) で平均値は 66.29mm (右) (7 例)、66.83mm (左) (6 例) となり骨体は全体的にやや小さい。中央断面示数は最小値が 69.57 (右)、68.00 (左)、最大値は 82.61 (右)、85.71 (左) で、平均値は 77.79 (右) (7 例)、75.60 (左) (6 例) となり、骨体に扁平性は認められないが、最小値となる 2 本については骨体に弱い扁平性が認められる。

4. 推定身長値

推定身長値を算出することができたのは上腕骨 2 本 (HU-9、HU-3)、大腿骨 2 本 (FE-1、FE-2) からである。まず上腕骨最大長から、pearson および藤井の公式を用いて推定身長値を算出すると、HU-9 (男性) では 157.75cm (pearson、左)、158.09 cm (藤井、左) となり身長はそれほど低くない。HU-3 (女性) では 141.43cm (pearson、右)、141.75cm (藤井、右) となり、身長はかなり低い。大腿骨では FE-1 (男性) で 158.20cm (pearson、右)、155.92 cm (藤井、右) となり上腕骨の算出値と

ほぼ同様に身長は低くない。FE-2（女性）では（141.70）cm（pearson、右）、（140.34）cm（藤井、右）となり女性も上腕骨の算出値と同様に身長はかなり低い。

5. 抜歯

検討できたのは頭蓋9体、下顎骨15体である。上顎骨が残存していたのは3体である。1体（SK-1）は残存している歯槽が閉鎖していたので抜歯の有無は不明であるが、その他の上顎では抜歯は認められなかった。ガルマンドウ原洞穴遺跡から出土した人骨には下顎の抜歯が認められたが、摩文仁ハンタ原遺跡出土の下顎骨では15体ともに抜歯は認められなかった。

考 察

1. 頭蓋

計測ができた頭蓋は男性のみなので、男性について沖縄県内での検討をおこなってみた。

(1) 脳頭蓋

第4表は男性の脳頭蓋の比較表である。頭型については九州との関連を検討するために、鹿児島県の市来縄文人、長崎県の脇岬縄文人、大分県の粉縄文人の計測値も表示した。まず、平均値での検討をおこなった。男性では3例の頭蓋長幅示数が算出できた。1例は中頭型（78.57）に、2例（80.68、[81.56]）は短頭型に属しており、3例の平均値は80.27となる。この平均値は第4表のうち沖縄県では最低値となるが、具志川島の80.92に近い。伊礼原Cは超短頭型を示し、頭型が短頭性を示す沖縄でもかなり異質であることがわかる。第4表をみる限り、沖縄県内での頭型は短頭性が弱いもの、それよりもやや強いもの、著しく短頭性が強いものに分けることができそうで、ハンタ原、港川、具志川島は弱い短頭型で、クマヤー洞穴、真志喜安座間原がやや強く、伊礼原Cは例外的に短頭性が強い。九州では粉が短頭型を示すが、市来は短頭に近い中頭型、脇岬は中頭型である。頭型については、沖縄は九州よりも、より短頭に傾く傾向がみられる。

沖縄県内での縄文人の頭型についてももう少し詳しく検討しておきたい（第5表）。例数が多いのはクマヤー洞穴、真志喜安座間原遺跡、具志川島遺跡群である。クマヤーでは4例の頭蓋長幅示数が算出できた。4中3例（80.79、80.65、82.66）は短頭型に、1例（86.23）は過短頭型に属しており、4例の平均値は82.58となる。真志喜安座間原では顔面の形態が他とは異なる39-Aを含めて7例の算出が可能であった。中頭型が2例（77.40、78.77）、短頭型が2例（80.79、82.51）、超短頭型が3例（90.12、90.17、91.41）で、39-Aを除く6例の平均値は84.78となる。ちなみに39-Aは82.51である。真志喜安座間原の頭型は伊礼原Cなみの超短頭型がみられることが特徴である。具志川島では4例の計測値が明らかになっている。4例中3例（82.02、80.56、82.51）は短頭型に、残り1例（78.57）は中頭型で、平均値は80.92となる。頭型に関しては、ハンタ原は具志川島に近い様相を呈しているといってもよい。

(2) 顔面頭蓋

第6表は男性の顔面頭蓋の比較表である。頬骨弓幅は1例しか計測できなかったが、この1例（SK-1）の計測値はやや小さい。中顔幅は2例計測ができたが、1例（SK-3）はかなり大きい。上顔高は3例の計測ができた。その計測値は63mm～64mmで、平均値は63.67mmとなり、高径は低い。この平均値

は第6表のうち沖縄県の例では、クマヤー洞穴と具志川島よりも小さく、港川、伊礼原C、真志喜安座間原に近い値である。コルマンの上顔示数は1例(SK-1)が算出できた。この1例の示数値は第6表のうち沖縄県の例としては具志川島9号に次いで大きな値を示している(安座間原39-Aを除く)。一方、ウィルヒョーの顔示数は2例算出できた。1例(SK-1)は〔64.00〕で、第6表では安座間原39-Aに次いで大きい、もう1例(SK-3)は〔57.14〕と、かなり小さく、この値は第6表では最小値である。

眼窩示数は2例算出できた。1例(SK-1)は第6表では、最小値となり、港川に近い。もう1例(SK-3)も小さく、港川に次いで小さな値である。鼻示数も2例が算出できた。1例(SK-1)は第6表では、最大値を示し著しく低鼻であるが、もう1例(SK-3)は第6表では市来に一致し、粉に次いで小さな示数値を示した。

次いで沖縄県内での検討をおこなってみた。比較的計測値が揃っている港川I、真志喜安座間原8、31、33、39-A、具志川島1号と9号および本遺跡のSK-1を中心に検討してみた。39-Aは北部九州弥生人なみの計測値と示数値を示す唯一の例外で、この1例が沖縄県で確認されたことは重要であるが、本稿ではこれ以上立ち入らないことにする。39-A以外の6例をみると、顔高が116mmを超える真志喜安座間原8、34、具志川島1号、9号のうち、具志川島1号を除く3例が上顔高も66mmを超える。顔示数は79.99以下と80.00以上に二分することができ、80.00以上のものは、真志喜安座間原8、34、具志川島1号、9号で、前者には港川I、真志喜安座間原31が属している。上顔示数は、45.00以上のものとそれ以下のものに二分できるが、前者には真志喜安座間原8、34、具志川島9号のほかにハンタ原SK-1が属し、後者には港川I、伊礼原C、真志喜安座間原31、具志川島1号が属している。沖縄県の例では、真志喜安座間原31が典型的な「低・広顔」で、顔が小さい個体であるが、この例に近いのが、港川Iや伊礼原Cで、具志川島9号に比較的近い容貌をもつ例が真志喜安座間原8、34のほかにハンタ原SK-1も含まれるものと思われる。

第5表 沖縄県の頭蓋長幅示数(男性)

遺跡名	ハンタ原		クマヤー洞穴		安座間原		伊礼原C		具志川島	
	人骨番号	頭蓋長幅示数	人骨番号	頭蓋長幅示数	人骨番号	頭蓋長幅示数	人骨番号	頭蓋長幅示数	人骨番号	頭蓋長幅示数
	SK-1	78.57	SK-4	80.79	15	77.40	SK-1	91.12	1号人骨	82.02
	SK-2	80.68	SK-5	80.65	31	78.77			2号人骨	78.57
	SK-3	〔81.56〕	SK-14	86.23	34	90.17			9号人骨	80.56
			SK-16	82.66	37	91.41			11号人骨	82.51
					41	90.12				
					52	80.79				
平均値	n=3	〔80.27〕	n=4	82.58	n=6	84.78	n=1	91.12	n=4	80.92
					39-A	82.51				

〔 〕 = 片側 × 2

要 約

沖縄県糸満市字摩文仁ハンタ原に所在する摩文仁ハンタ原遺跡の2007年の発掘調査で出土した人骨の人類学的観察と計測をおこない、以下の結果を得た。

1. 今回報告するのは2007年の発掘調査で出土した人骨のうち人骨が最も集積した「集骨3」の上層から得られた人骨である。所属時代は、縄文時代後期に属する人骨である。
2. 頭型を知ることができたのは男性3例のみである。1例は中頭型(78.57)に、2例(80.68、〔81.56〕)は短頭型に属しており、3例の平均値は80.27となり、この値は中頭型に近い短頭型である。

3. 顔面の計測も3例が可能であったが、いずれも一部しかできなかった。顔面は低・広顔である。
4. 男性の上腕骨は、沖縄の縄文人としては長さが長く、骨体の径も大きく、骨体はかなり扁平である。一方、女性上腕骨は長さが短く、骨体の径は大きく、男性同様骨体はかなり扁平である。
5. 男性の大腿骨も長さは沖縄の縄文人としては長く、骨体はやや細い。しかし、粗線や骨体両側面の後方への発達は良好で柱状性が認められ、骨体上部も扁平である。一方、女性大腿骨は長さが短く、骨体も細いが、骨体両側面の後方への発達は良好で、骨体上部はかなり扁平である。
6. 男性の脛骨は、骨体の径が小さく、骨体には扁平性は認められない。女性脛骨は沖縄の縄文人としては骨体の径が大きく、骨体は扁平ではない。沖縄では、縄文人脛骨は男女とも扁平性がかなり弱いか、ほとんど認められないという本土（九州・本州・四国）とは異なった脛骨形態が認められるようである。
7. 男性について、上腕骨と大腿骨の中央周の比（上腕骨 / 大腿骨）を算出してみると、港川人 73.49、ガルマンドウ 79.42、真志喜安座間原 82.66、ハンタ原 86.29 となり、本例は大腿骨体の大きさに比べて、上腕骨が太いという特徴が認められる。女性では、港川 73.10、真志喜安座間原 84.01、ハンタ原 86.04 となり、男性と同じように女性も大腿骨の大きさの割には上腕骨が太い。
8. 男女各1例ずつ大腿骨から推定身長を算出することができた。男性は 158.20cm(Pearson)、女性は 141.70cm で、男性は木綿原弥生人 (158.57cm) や西北九州弥生人なみ (158.79cm) の身長で、それほど低くはないが、女性は著しく低身長である。
9. 摩文仁ハンタ原遺跡からは27体を超える縄文人骨が多種多様な貝製装身具類とともに出土した。これらは沖縄本島南部の先史時代を解明するための貴重な資料であるが、沖縄では資料数の少ない縄文後期人骨がある数まとまって出土しており、琉球列島におけるヒトの形質的変遷を明らかにするための貴重な資料となるものである。

《参考文献》

1. Baba, H., b. Endo, 1982: Postcranial Skeleton of the Minatogawa Man. The Minatogawa Man (The university Tokyo, bulletin, 19) : 61-195.
2. 金関丈夫、1929: 沖縄県那覇市外城嶽貝塚より発見せる人類大腿骨に就いて。人類学雑誌、44 : 217-230.
3. Martin-Saller, 1957: Lehrbuch der Anthropologie. Bd. I. Gustav Fischer Verlag, Stuttgart : 429-597.
4. 松下孝幸・他、1988: 沖縄県宜野座村クジチ墓出土の近世人骨。宜野座村乃文化財第6集（クジチ墓・クジチ原遺跡発掘調査報告書）: 107-140.
5. 松下孝幸・他、1989a: 沖縄県北谷町クマヤ洞穴出土の古人骨（縄文時代晩期相当期人骨）(会)。解剖学雑誌、64 : 362.
6. 松下孝幸・他、1989b: 沖縄県北谷町伊礼原B遺跡出土の人骨。伊礼原B遺跡—旧メイモスカラー地区雨水排水施設工事に係る発掘調査—（北谷町文化財調査報告書第8集）: 39-48.
7. 松下孝幸・他、1990: 沖縄県浦添市城間古墓群出土の近世人骨。城間古墓群—牧港補給地区開発工事に伴う緊急発掘調査— : 75-112.
8. 松下孝幸・他、1992: 沖縄県宜野湾市真志喜安座間原遺跡出土の縄文・弥生時代人骨。謝名II（真志喜土地区画整理事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書 [1]）(宜野湾市文化財調査報告書第15集) : 第5章 : 1-99.
9. 松下孝幸・他、1993: 沖縄県具志川島遺跡群出土の古人骨。具志川島遺跡群（伊是名村文化財調査報告書第9集）: 215-244.
10. 松下孝幸、1996: 沖縄県北谷町上勢頭古墓群出土の近世人骨。上勢頭古墓群（北谷町文化財調査報告書第16集）:

105-115.

11. 松下孝幸、2001a：沖縄県大里村大里城出土のグスク時代人骨。大里城一都市公園計画に係わる緊急確認発掘調査報告書（2）－：109-122.
12. 松下孝幸、2001b：沖縄県北谷町山川原古墓群出土の近世・近代人骨。山川原古墓群（2）－瑞慶覧（11）倉庫建設に係る文化財発掘調査報告（北谷町文化財発掘調査報告書第20集）：239-273.
13. 松下孝幸、2001c：シャレコウベが語る、日本人のルーツと未来、長崎新聞社（長崎新聞社新書）。
14. 松下孝幸、2003a：沖縄県読谷村木綿原遺跡出土の弥生時代人骨。南島考古、No. 22：67-108.
15. 松下孝幸、2003b：沖縄県北谷町後兼久原遺跡出土のグスク時代人骨。後兼久原遺跡一庁舎建設に係る文化財発掘調査報告書－（北谷町文化財調査報告書第21集）：385-399.
16. 松下孝幸、2003c：沖縄県北谷町大作原古墓群出土の人骨。大作原古墓群－嘉手納（12）・（13）送油管移設に係る文化財発掘調査報告書－（北谷町文化財調査報告書第22集）：149-161.
17. 松下孝幸、2004：「自然人類学」『環境考古学ハンドブック』：444-454. 朝倉書店
18. 松下孝幸、2006：宜野湾市嘉和テラガマ洞穴遺跡出土の縄文・グスク時代人骨。嘉和テラガマ洞穴遺跡（宜野湾市文化財調査報告書 第35集）：81-102.
19. 松下孝幸、2007a：沖縄県北谷町伊礼原遺跡出土の縄文人骨。伊礼原遺跡（北谷町文化財調査報告書第26集）：467-479.
20. 松下孝幸、2007b：沖縄県具志頭村ガルマンドウ原洞穴遺跡出土の人骨。土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム研究紀要第2号：38-62.
21. 松下孝幸、2007c：宜野湾市喜友名後原・勢頭原丘陵古墓群出土の近世人骨。喜友名後原・勢頭原丘陵古墓群喜友名前原第一古墓群（宜野湾市文化財調査報告書第40集）：55-72.
22. 松下孝幸、2007d：宜野湾市喜友名前原第一古墓群出土の近世人骨。喜友名後原・勢頭原丘陵古墓群喜友名前原第一古墓群（宜野湾市文化財調査報告書第40集）：73-89.
23. 松下孝幸・他、2008a：沖縄県北谷町伊礼原E遺跡出土の縄文人骨。伊礼原B遺跡伊礼原E遺跡（北谷町文化財調査報告書第27集）：214-223.
24. 松下孝幸・他、2008b：沖縄県北谷町伊礼原D遺跡出土の古人骨（1）。伊礼原D遺跡（北谷町文化財調査報告書第28集）：212-220.

第4表 脳頭蓋計測値 (男性, mm) (Table 4. Comparison of male calvarial measurements and indices)

	摩文仁ハంతラ原		港川		伊礼原C		具志川島		真志喜安座間原		市来		脇岬		粉			
	SK-1	SK-2	I	n	M	SK-1	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M		
1. 頭蓋最大長	182	176	182	4	175.75	169	4	180.75	7	174.14	183	1	185	4	188.75	5	177.80	
8. 頭蓋最大幅	143	142	148	6	145.33	154	4	146.25	6	146.83	151	1	147	5	147.20	5	143.60	
17. ハジオン・ブレグマ高	-	-	134	2	143.50	-	3	141.33	2	137.00	-	1	144	-	-	5	133.80	
8/1. 頭蓋長幅示数	78.57	80.68	[81.56]	81.3	4	82.58	91.12	4	80.92	6	84.78	82.51	1	79.46	4	76.63	5	80.88
17/1. 頭蓋長高示数	-	-	-	73.6	1	81.50	-	3	78.37	2	78.14	-	1	77.94	-	5	75.39	
17/8. 頭蓋幅高示数	-	-	-	90.5	2	96.71	-	3	95.94	2	92.65	-	1	97.96	-	5	93.27	
1+8+17/3. 頭蓋モズルス	-	-	-	154.7	1	152.33	-	3	156.33	2	153.50	-	1	158.67	-	5	151.73	
23. 頭蓋水平角	522	507	-	523	2	522.50	515	4	525.25	4	511.75	535	1	530	4	534.25	5	512.40
24. 楯弧長	325	330	-	303	4	327.25	324	4	335.00	4	320.25	339	1	331	4	325.75	5	311.20
25. 正中矢状弧長	376	-	-	358	1	384	-	3	373.33	2	368.50	384	1	389	-	-	3	367.33

[] = 片側 × 2

第6表 顔面頭蓋 (男性, mm, 度) (Table 6. Comparison of male facial measurements and indices)

	摩文仁ハంతラ原		港川		伊礼原C		具志川島		真志喜安座間原		市来		脇岬		粉		
	SK-1	SK-2	I	n	M	SK-1	n	M	n	M	n	M	n	M	n	M	
45. 頬骨弓幅	[138]	-	144	-	-	[146]	3	142.67	5	138.00	(137)	1	140	1	149	-	
46. 中顔幅	[100]	-	105	1	106	-	2	[104.50]	3	103.50	105	1	104	2	107.00	4	101.00
47. 顔高	-	[112]	107	-	-	-	2	119.00	3	112.67	124	1	116	2	118.50	4	111.50
48. 上顔高	(64)	63	63	1	65	63	2	65.50	3	62.33	71	1	66	2	71.50	3	61.33
47/45. 顔示数 (K)	-	-	74.3	-	-	-	2	82.37	3	80.83	(90.51)	1	82.86	1	79.33	-	-
48/45. 上顔示数 (K)	[46.38]	-	43.8	-	-	43.15	2	45.35	2	45.37	(51.82)	1	47.14	1	46.67	-	-
47/46. 顔示数 (V)	-	-	101.9	-	-	-	2	[113.89]	2	106.71	118.10	1	111.54	1	105.45	4	110.46
48/46. 上顔示数 (V)	[64.00]	-	60.0	1	61.32	-	2	[62.66]	2	59.84	67.62	1	63.46	1	61.82	3	58.27
40+45+47/3. 顔面モズルス	-	-	117.7	-	-	-	2	121.00	1	111.67	-	1	120.00	-	-	-	-
50. 前眼窩間幅	18	20	19	2	21.50	-	2	19.50	4	19.75	20	1	20	1	17.4	4	18.75
44. 前眼窩幅	44	-	112	1	102	-	2	100.00	5	98.40	101	1	100	2	101.35	4	100.25
50/44. 眼窩間示数	-	-	17.0	1	19.61	-	2	19.52	4	20.08	19.80	1	20.00	1	16.04	4	18.68
51. 眼窩幅 (右)	46	43	45	1	43	42	2	43.00	6	41.00	43	1	41	1	47	4	44.00
眼窩幅 (左)	-	45	46	1	43	-	2	42.00	5	40.60	45	1	45	3	45.00	4	43.00
眼窩高 (右)	(30)	30	30	1	31	(30)	2	34.00	3	30.33	(32)	1	31	3	33.33	4	32.00
眼窩高 (左)	(32)	-	30	2	31.50	-	2	33.00	3	31.33	32	1	(34)	3	33.67	4	32.50
52/51. 眼窩示 (右)	(65.22)	-	66.7	1	72.09	(71.43)	2	79.06	3	74.05	(74.72)	1	75.61	1	75.56	4	72.78
眼窩示 (左)	-	-	65.2	1	72.09	-	2	78.57	3	77.68	71.11	1	(75.56)	3	74.85	4	75.63
54. 鼻幅	28	25	(26)	1	28	26	2	25.00	3	24.00	27	1	25	2	29.50	1	23
55. 鼻高	49	51	49	1	52	50	2	50.50	4	48.75	54	1	51	2	55.00	4	49.25
54/55. 鼻示数	7.14	49.02	(53.1)	1	53.85	52.00	2	49.53	3	49.55	50.00	1	49.02	2	53.64	1	46.00
72. 全側面角	-	-	-	1	85	-	2	89.00	3	82.00	86	1	73	2	79.00	3	80.33
73. 鼻側面角	-	-	-	1	87	-	2	91.00	3	84.33	89	1	73	2	80.50	4	85.00
74. 齒槽側面角	-	-	-	1	70	-	2	82.50	3	73.00	77	1	73	2	73.50	3	69.00

[] = 片側 × 2 () = 推定値

第7表 脳頭蓋 (mm) (Calvaria)、摩文仁ハンタ原

		SK-1	SK-2	SK-3	平均値		Min.	—	Max.
		男性	男性	男性	n	M			
1.	頭蓋最大長	182	176	179	3	179.00	176	—	182
8.	頭蓋最大幅	143	142	[146]	2	142.50	142	—	143
					[3]	143.67	142		146]
17.	バジオン・プレグマ高	—	—	—		—			
8/1	頭蓋長幅示数	78.57	80.68	[81.56]	2	79.63	78.57	—	80.68
17/1	頭蓋長高示数	—	—	—		—			
17/8	頭蓋幅高示数	—	—	—		—			
1+8+17/3	頭蓋モズルス	—	—	—		—			
5.	頭蓋底長	—	—	—		—			
9.	最小前頭幅	100	103	—	2	101.50	100	—	103
10.	最大前頭幅	123	123	—	2	123.00	123	—	123
11.	両耳幅	122	131	—	2	126.50	122	—	131
12.	最大後頭幅	114	108	—	2	111.00	108	—	114
13.	乳突幅	—	—	—		—			
7.	大後頭孔長	—	—	—		—			
16.	大後頭孔幅	—	—	—		—			
16/7	大後頭示数	—	—	—		—			
23.	頭蓋水平周	522	507	—	2	514.50	507	—	522
24.	横弧長	325	330	[332]	2	327.50	325	—	330
					[3]	329.00	325	—	332]
25.	正中矢状弧長	376	—	—	1	376			
26.	正中矢状前頭弧長	117	125	133	3	125.00	117	—	133
27.	正中矢状頭頂弧長	139	127	—	2	133.00	127	—	139
28.	正中矢状後頭弧長	124	—	—	1	124			
29.	正中矢状前頭弦長	104	109	113	3	108.67	104	—	113
30.	正中矢状頭頂弦長	122	113	—	2	117.50	113	—	122
31.	正中矢状後頭弦長	103	—	—	1	103			
29/26	矢状前頭示数	88.89	87.20	84.96	3	87.02	84.96	—	88.89
30/27	矢状頭頂示数	87.77	88.98	—	2	88.37	87.77	—	88.98
31/28	矢状後頭示数	83.06	—	—	1	83.06			

〔 〕 = 片側 × 2

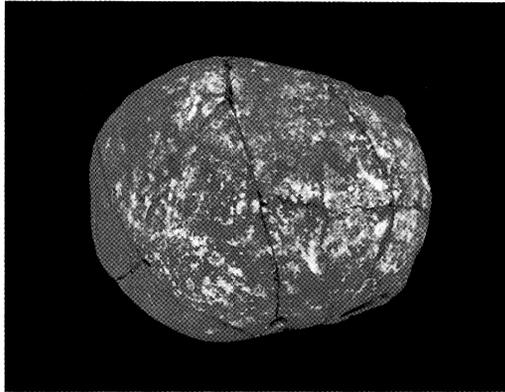
第9表 鼻根部 (mm、度) (Nasal root)、摩文仁ハンタ原

		SK-1	SK-2	平均値		Min.	—	Max.
		男性	男性	n	M			
50.	前眼窩間幅	18	20	2	19.00	18	—	20
50 A .	鼻根横弧長	23	28	2	25.50	23	—	28
50/50A	鼻根彎曲示数	78.26	71.43	2	74.84	71.43	—	78.26
57.	鼻骨最小幅	—	—		—			
44.	両眼窩幅	—	—		—			
50/44	眼窩間示数	—	—		—			
a .	前頭突起上幅 (右)	10	—	1	10			
	(左)	11	—	1	11			
b .	前頭突起水平傾斜角	55	—	1	55			
c .	G-N 投影距離	3	—	1	3			
d .	鼻根角	—	—		—			
e .	G-R 距離	—	—		—			
f .	垂線高	—	—		—			
f / e	鼻根陥凹示数	—	—		—			
77.	鼻頬骨角	142	—	1	142			
F a	f m o 間距離	100	—	1	100			
F h	垂線高	17	—	1	17			
F h / F a	顔面扁平示数	17.00	—	1	17.00			

第8表 顔面頭蓋 (mm、度) (Facial skeleton), 摩文仁ハンタ原

		SK-1	SK-2	SK-3	平均值		Min.	—	Max.
		男性	男性	男性	n	M			
40.	顔長	—	—	—	—	—			
41.	側顔長	70 (右)	70	77	3	72.33	70	—	77
42.	下顔長	—	—	—	—	—			
43.	上顔幅	—	—	—	—	—			
45.	頬骨弓幅	[138]	—	—	[1	138]			
46.	中顔幅	[100]	—	[112]	[2	106.00	100	—	112]
47.	顔高	—	—	—	—	—			
48.	上顔高	(64)	63	64	2	63.50	63	—	64
					(3	63.67	63	—	64)
47/45	顔示数 (K)	—	—	—	1	—			
48/45	上顔示数 (K)	[46.38]	—	—	[1	46.38]			
47/46	顔示数 (V)	—	—	—	—	—			
48/46	上顔示数 (V)	[64.00]	—	[57.14]	[2	60.57	57.14	—	64.00]
40+45+47/3	顔面モズルス	—	—	—	—	—			
50.	前眼窩間幅	18	20	—	2	19.00	18	—	20
44.	両眼窩幅	—	—	—	—	—			
50/44	眼窩間示数	—	—	—	—	—			
51.	眼窩幅 (右)	46	—	43	2	44.50	43	—	46
	(左)	—	45	—	1	45			
52.	眼窩高 (右)	(30)	—	30	1	30			
					(2	30.00	30	—	30)
	(左)	(32)	—	—	(1	32)			
52/51	眼窩示数 (右)	(65.22)	—	69.77	1	69.77			
					(2	67.49	65.22	—	69.77)
	(左)	—	—	—	—	—			
54.	鼻幅	28	25	—	2	26.50	25	—	28
55.	鼻高	49	51	53	3	51.00	49	—	53
54/55	鼻示数	57.14	49.02	—	2	53.08	49.02	—	57.14
55 (1)	梨状口高	—	—	—	—	—			
56.	鼻骨長	—	—	—	—	—			
57.	鼻骨最小幅	—	—	—	—	—			
57 (1)	鼻骨最大幅	—	—	—	—	—			
60.	上顎歯槽長	—	—	—	—	—			
61.	上顎歯槽幅	—	—	—	—	—			
62.	口蓋長	—	—	—	—	—			
63.	口蓋幅	—	—	—	—	—			
64.	口蓋高	—	—	—	—	—			
61/60	上顎歯槽示数	—	—	—	—	—			
63/62	口蓋示数	—	—	—	—	—			
64/63	口蓋高示数	—	—	—	—	—			
72.	全側面角	—	—	—	—	—			
73.	鼻側面角	—	—	—	—	—			
74.	齒槽側面角	—	—	—	—	—			

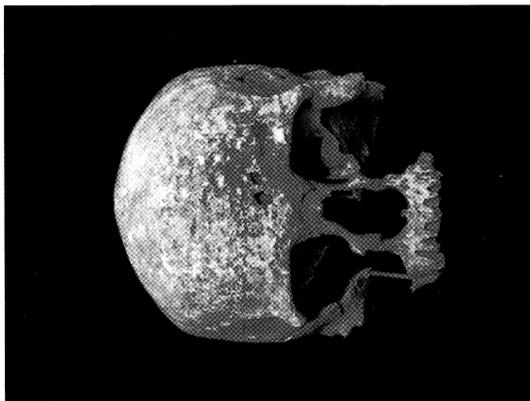
() = 推定値 [] = 片側 × 2



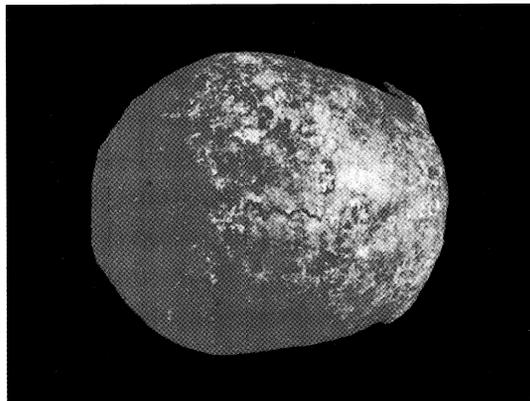
頭蓋上面 (Superior view of the Skull)



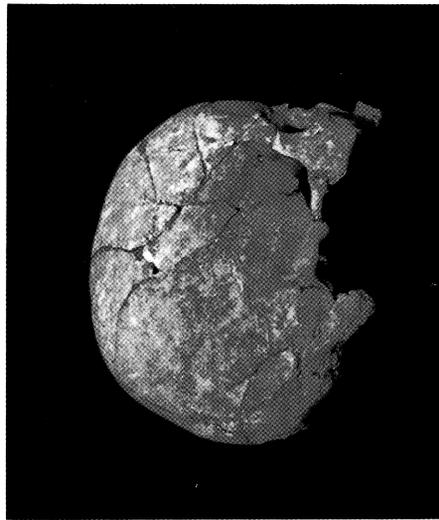
頭蓋正面 (Frontal view of the Skull)



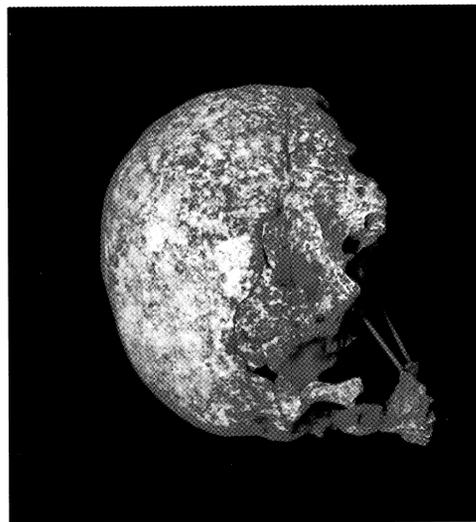
頭蓋上面 (Superior view of the Skull)



頭蓋正面 (Frontal view of the Skull)



頭蓋側面 (Lateral view of the Skull)
摩文仁ハンタ原 SK-1 (男性・熟年)
(The Mabuni-hantabaru SK-1, mature male)



頭蓋側面 (Lateral view of the Skull)
摩文仁ハンタ原 SK-2 (男性・熟年)
(The Mabuni-hantabaru SK-2, mature male)

報告書抄録

ふりがな	まぶにはんたばるいせきはつくつちょうさほうこく							
書名	摩文仁ハンタ原遺跡発掘調査報告							
副書名	沖縄県糸満市所在の摩文仁ハンタ原遺跡発掘調査報告							
巻次								
シリーズ名	土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム 研究紀要							
シリーズ番号	第4号							
編著者名	松下孝幸 湖城清 大城一成 松下真実							
編集機関	土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム							
所在地	〒759-6121 山口県下関市豊北町大字神田上891-8							
発行年月日	西暦 2009年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° / ′ / ″	° / ′ / ″			
まぶに 摩文仁ハン た原遺跡	おきなわけんとまんし 沖縄県糸満市 あざまぶに 字摩文仁ハンタ ばる 原547番地	47210		26° 05′ 25″	127° 43′ 05″	20070702 ～ 20070710 20080707 ～ 20080713	5 m ²	学術調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
摩文仁ハンタ 原遺跡	岩陰	縄文 後期	石囲墓 集骨		土器 石器 貝製品 人骨		埋葬遺構 豊富な貝 製品出土	

土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム

研究紀要

第4号

発行年月日 2009年3月
編集・発行 土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム
〒759-6121 山口県下関市豊北町神田上 891-8
TEL 083-788-1841・1842

印 刷 アリフク印刷株式会社
〒759-5101 山口県下関市豊北町栗野 4896-8
TEL 083-785-0311
FAX 083-785-0312
